

大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和十一年九月十五日發行

第十三卷第九號(每月一回十五日發行)

麻生路郎★編輯

川柳雑誌

NO. IX VOL. XIII

● 劑ンホルモ性男的标准 ●

本品は在來の臓器製劑等とは異り、世界最初の化學合成に依つて得たる純粹男性ホルモン結晶を主成分とし、注射液は毎筒必ず一瓵（二〇鶏冠單位）内服用錠劑は毎錠〇・一二瓵（二・四鶏冠單位）の純粹結晶を含有し力價恒に一定、奏効全く確實、副作用絶無なる標準男性ホルモン劑なり。

碍障期年更

退減力憶記・退減力精・怠倦・痛頭
等化退の腺殖生・退減力動活力聽視

弱衰經神的性

性・乏欠慾性・漏早・退減力起勃
病神精及弱衰經神的性・退減感

象現衰老般一

他其病胖肥・進亢壓血・化硬脈動



裝 包	
注射液	5管・10管
錠劑（内服用）	30錠・3・6
	100錠・3・0
	250錠・2・0

所究研學化寶嘉
部品藥社會式株產物寶嘉

地番十目丁一通堀波阿區西市阪大
番八二七五七阪大替振
ルビ宗正菊三西座銀區橋京市京東

所造製
元賣發

店本
店支

若返りに
ジノン
ホルモン
!

● 用服内 ●
● 用射注 ●

呈贈献文

川柳雑誌

第三十卷 第九號

川柳忌を前にして

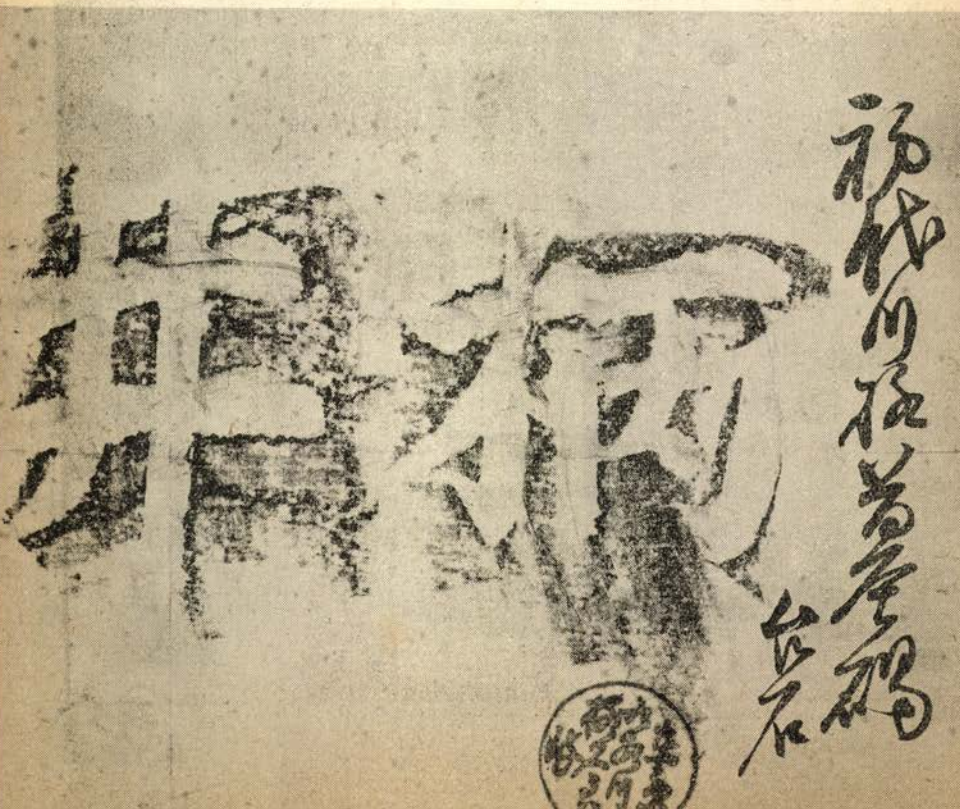
この九月二十三日が初代川柳の百四十七回忌にあたります。初代川柳は名を勇之助、姓を柄井と云ひました。後に勇之助を改めて八右衛門と稱へ、俳諧の號を川柳と云ひました。短詩川柳の名はこの雅號から生れたのです。

×

八代將軍吉宗公の治世、享保三年戊戌に江戸で生れ、十一代將軍家齊公の治世、寛政二年九月二十三日に七十三歳で江戸で亡くなられました。木枯やあとで芽をふけ川柳が辭世だと云はれて居りますが眞偽のほどは判りません。しかし川柳が後世芽をふいたことは確です。

×

大正十二年の關東大震災の時、句碑が火災のため焼け損じたので、近く句碑の再建が全柳人の手で企てられて居ります。寺は東京市の淺草區榮久町三五番地の龍寶寺です。



寫眞は初代川柳の墓碑の墓石で、本誌の創刊當時、坂井久良岐翁が石摺にして我社へ寄せられたものです。



川柳雜誌九月號目次

表紙・路郎筆



文苑

川柳名句評釋

麻生路郎……(四)

「街の雑音」を讀む

阿部閑生……(六)

金戒光明寺の虎の繪

高尾亮雄……(三)

武玉川二篇研究 (二八)

梅本秋の屋
森東魚……(三〇)
蛭子省二

俳諧の母屋へ

安川久流美……(六)

川柳指導講座

塚越正光……(二)

『氣違ひ』を語る

沖野岩三郎……(三七)

三都柳壇の今昔

諸家……(三五)

柳言餘滴

——川柳でどなり込まれた話——

池澤文雄……(三四)



川柳オリンピック風景……………森 東魚…(四〇)

川柳と松浦静山侯……………石崎柳石…(五)

川柳横町……………不死鳥…(五)

川柳人協會と私……………麻生路郎…(四)

創作

近作柳樽……………(八)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………山川紫明選…(六)

一路集……………友達……………喜多春秋…(四)
喫茶店……………増位汀柳…(三)

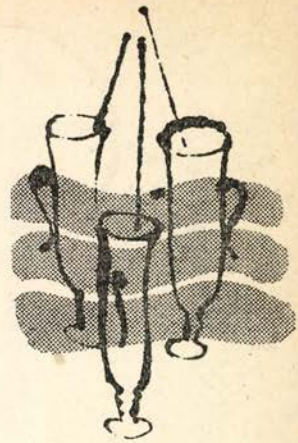
各地柳壇……………(五)

川・協・の・頁……………(四一) 柳誌要目……………(四六)

柳界展望……………(四六) 川柳家戸籍調……………緑雨…(四九)

川・雑・案・内……………(五〇) 編輯縦横……………路郎…(五)

川柳雜誌社關係の人々……………(五八)



川柳名句評釋

(2)

麻 生 路 郎

完膚なく虫に螫されしキヤンピング

閑 生

はやりものを追ふ不用意さを罵りつくした、皮肉な句である。完膚なくの漢文調こそ痛烈である。

救ひこは金でなければ用がなし

緑 之 助

「何んとかしてくれ」、「何んとかしてやろ」と云つたところで、それは金で何んとかして欲しいのであり、金で何んとかする積りなのである。阿彌陀も金で光ると昔から云ふあゝ金のみが光る世の中か。

白いなあ ちご海水へついてこい

明 珠

夏休みの日曜か。白い雲が沖に浮ぶ情景もよい。ひた走る三角帆もうれしい。父らしい情愛が引きずつて出た一人ツ子。

ノーパンでいけたらいつそ涼しかろ

豆 秋

誰でも考へることを作者は至極のんきに云ひ放つてゐるノータイ、ノーハット、ノーチツプ、云く云く云くと、はやりものを掴まへたところにも人生に對する軽い皮肉がある。

ぼくは病人僕なのぞみもかはつたな

愚 寵

遠大の望みを持つてゐた筈だつたのに、不治の病に侵されて白いベッドに横はつてからの望みは誠に哀れである。熱が僅に二分下ることをのぞんだり、せめて御飯が喰べられる日を待つたり、變り果てたる僕ではある。

金送る 孝行だけは續け切り

勝 二

妻を娶れば子も出来る。その割には月給が昇らないのが現代サラリーマンの悩みである。それでも故里の老ひたるちちはへの送金だけはかかさないところに彼氏の心の美しさがあるのである。

七十を過ぎても髪の手を云ひ

里十九

女大學盛んなりしころの娘さんのみだしなみだけは褒めてもいいだらう。今どきの斷髮の娘さん方の夢にも想像し得られない境地ではある。

立候補あの演説は俺が書き

喜由

よくある圖だ。演説のロクに出来ぬ男が市議や府議に打つて出ると、みんなこの手で、金の力で演説草稿を書かせる。肝心の原稿で堂々と虹の如き政論を吐いてゐるのが裏長屋に住んで家賃も拂へないみじめな生活をしてゐるものだ。それでゐるあの演説は俺が書いたのだといふブライドだけは持つてゐるのである。社會の裏を描出した句。

機械一臺この一軒が食ひはぐれ

路郎

電車が出来て人力車が滅びた歴史はそんなに古くはない家内工業でボツ／＼やつてゐるところへ大量生産の機械が発明されると、それがために生活の根底を覆へされる悲劇が往々にして生れる。

養うてあげると言はぬ妻となり

雅幽

眞逆の時には妾が働いても養つてあげますよと、云つてゐた妻ではなかつたか。それに夫が引續いての病軀から失職したとなると――譯もなく心細くなつて、貴郎どうしませうといふ妻となつてしまつた。

葉卷一本寶のやうにしまつとき

春秋

ガラにない貰ひものの葉卷一本、それをぶか／＼ふかすほどの心のゆとりがない。いつまで／＼机の抽斗の隅に寶物のやうに藏まはれてゐるのだ。バット級であることが句外に出てゐるのも面白い。

こもかくもかついで歩く銀狐

水車

銀狐といつてもピンからキリまであるが、ともかく人並みにかついで歩いて嬉しがつてゐるさまを見ると滑稽だ。

瀆職の後の検査は茶も飲まず

青兒

引張られた後の検査のイヤ堅苦しいこと、お茶も吞まない。まるで猫が膾を吹いてゐるやうで寧ろ物の哀れを感じさせられる。



『街の雑音』

を
讀
む

阿部 閑生

頂上に立てば日本は山ばかり

全句六百餘中を抽んで、この句は可なりの高峰である。日本の脊柱に立つて四方を見渡すと、この句の

實感そのまゝに起伏重疊せる山又山である。仙の字俗の字から自我といふ一個の人を取去れば、臆界はまこと山と谷ばかり。

花曇り二度目に會へば酔つてゐる

はじめに會つて行き過ぎた邊りを想像に委せたところに餘情を含ませ、二度目に會へば定石通り花に溶けてんでゐる有様を句面に浮ばせて、時と場所の變化を巧みにそれとなく現してゐる。

折靴靴のかゝとがありません

この表現にこの句法はよい。使ひ古した折靴と片減りに磨滅した靴の踵とが生活の凡てを描出して隠すところなし。

意見することも控へ目とはなりぬ
最う何もかもちつと見てゐるより

俳諧の母屋へ

〓八月の川柳日記から〓

安川 久流 美

加賀の俳人北枝の句で

〇蝙蝠に手元もくらし油賣りといふのがある。こんなのを「燈下管制」ばやりの時代に詠むと、あるグロウ味の蝙蝠に對し凄愴な懷しさがわいて来る。そしてランブ時代よりも一世紀前のタネ油時代、即ち氣味悪い行燈の「猫の影」にさへも妖氣がせまる。之れを同じ着想でも現代ならば

〇蝙蝠に手元のくらしい紙芝居
さいふ句でも作りさうではないか、

昔の北枝もいまの柳人も森の都のくらしには殆ど同じ想が流れてゐるのだ。たゞ表現に於て其時代々々、風俗の變遷があるのみ。

× × ×

大正の初期に來澤した川上三太郎君は

〇豆ランブ 苦學の尻に虫が鳴き

と作つた、もつと大昔なら「螢の光」さいひたいが、明治さしてはむしろ「豆ランブ」はバタ臭いもの、今は神棚にさへ見る事も稀である。溪薄ないまの世では

〇盗電の下に苦學はトストパン

外はない明日が近づいて來てゐる、
 是ではならぬと思つて見たり、まあ
 可いわと諦めても見たたり、年令がじ
 わ／＼と心に加へる皺が、意見され
 る側の眼にはつきり映り出して來た
 嫁が島流れて來るのかと思ひ

斷間なく足下に打寄せる小波に、
 自分が前へ引出されるやうに感じ、
 島が大きく膨れて流れ近づくやうに
 見える、錯覺のもたらす美を捉へた
 品のよい一句である。

近所の子とお父さんを通さない

まだそれ程の年ではないが好々爺
 の素質をたつぷりと所有するお父さ
 んが勤めの歸りに子供がお手々つな
 いで張る良に係つてやつて喜んでゐ
 る、自然の情味がおのづから一幅の
 小景を成してゐる。

企てに父は驚くまいことか

この一句は集中の白眉とでも云へ
 やう、一讀ぐわんと背骨をどやされ
 た鈍強さを感じる。

一雫井戸一面に響くなり

相當に自信のある句らしく、それ
 だけに垢抜けのした所があり口中一
 杯にひろがつてゆく甘露一滴の味ま
 さに拘すべきものがある、其他

氷屋は床几ばかりの店となり

雑沓に迷子の道をあけてやり

草刈がゴムマリ一つ見付出し

藤棚へ春が來てから暗くなり

あけにくい障子は地震からでなし

等々、雑音の中に清音を採り、即

感に何物をか捕捉してゐながら、何
 處か物たりなさを抱かせて思ひ引か
 れながら各句を讀み進ましめる、幾
 分の自劣つたさ、もどうかしさを感
 じさせる事によつて相手を引附けて
 ゆくには表面の素氣なさど腹底の根
 強さを必要とする、これがこの句集
 を通じて現れた作者の特性ではなか
 らうかと云ふのが、全句讀了後の所
 感である。第二句集出づるの日を待
 望する。

さいふ贅澤さではなからうか、過去の句は
 一つの考證になつて行く時、始めて自分の
 齡をかぞへて驚くのである。

× × × ×

川柳に「時鳥」を詠んだ句はすくない。只
 有名な印象句として文象氏の作

○時鳥なきやア米でもさがるかい

さいふ口語體の句がある。——なんさはな
 しに面白い句、生活と趣味の仲の悪さを如
 實にしめしてある所に、永遠の名句といひ
 たいのである。これに比して劍花坊氏の

○少し手をゆるめなさんせ時鳥

などの句、都々逸調で末番の句に近いでは
 ないか。

× × × ×

錦浪さいへば有名な谷孫六さん、一にも
 二にも經濟を説く人だけに貯金句がよくあ
 る。

○貯金帳 タンスの奥の奥へ入れ

○子の貯金少したまると親が出し
 家庭を詠んだもので彼氏は川柳人としても
 常にこの「貯金」のことが頭にこびりついて
 るたものか、今も一般の家庭に對し、家婦
 の經濟々々を説いてゐる。

孫六は口でいふ程貯めてゐるす
 といへば御本人怒るかも知れない？



ライスカレー 今は丁稚の物となり
 家柄を見せたさにまでおごり
 兄弟の年が揃ふてギヤングめき
 酒饅頭その觸覺に氣を取られ
 屍骸を捲く白布へ風の吹く
 さみしさは醫者の勞働だけを知り
 實業家野球にこつた手の痛み
 掌に銀貨の光る私娼街

大版 朝田 新水

同 同 同 同 同 同 同

良き友に流るゝ水を教へられ
 掌のなかの子の魂を尊べり
 四十過ぎ宿命的なほくらです
 父として叫ぶころのおちつけり
 ぬけ毛する夜はかなしみのそこに
 腕力を信ずる四十すぎの戀
 林檎ころがり長男長女唇あいて
 柳友川村觀月君病む
 旅に出た忠治は君の心情か

兵庫 水谷 鮎美

同 同 同 同 同 同 同



不精罷女ぎらひの譚でなし	同	兵庫 長崎 柳秀	成上つて暮しを比べにくる	同
女とは金で動くと思うてゐ	同		こんなに成功したとピラを撒き給へ	同
花咲けば咲くで失職氣がふさぎ	同		まア失禮なと御機嫌を損ね	同
市場ならこんな刺身は十五錢	同		晝行けば白粉焼けの顔を出し	同
ひざ枕ゆるした仲のやうにさせ	同		慾を消してハラ／＼と夏を繰りぬ	同
仕事着で来て病人に羨まれ	同		冷奴御らんの通り福黒子	金澤 安川久流美
腹たてた方が損やと教へられ	同		腕白の和服になるは寝る仕度	同
將來は買ふデパートの札を読み	同		蠅叩き一茶の俳句など知らず	同
記者の眼に射竦められた重役級	大版 石田 沐天		郊外の電車すれ／＼花木檜	同
出てからは氣強く言へど保釋の身	同		原稿書く横に枕も置いてあり	同
御都合で先生々々と日毎来る	同		定紋のある提灯へ蟲がとび	同
會社から見ればヌターも一女工	同		踏切に帶をむすばぬ子が立つて	同
不貞なる妻と思へど美しくし	同		嫁に行くのをさげすんで年をとり	神戸 西村 明珠
親切な夫にされて葱を提げ	同		酒ばかり飲んでる様な記事となり	同
ハンドバックにまします戀の浮袋	同		免狀は貰うたが花がためられず	同
強情に呆れて女將喫ひつける	神戸 喜多 春秋		節約をせよと水道課の頼み	同
靴はいて今の女の歩るきやう	同		看護婦に聞けば看護婦いやといひ	同



ジャズバンド邪魔 きようまう にボンと打ち	同
合槌を打つ事ばかりくたびれる	同
東海林太郎もうきゝあきた頬をよせ	大阪 大西 八歩
苦勞して打算的なる戀をする	同
おいしいと言へば手料理うれしがり	同
颯爽としてズロースを買つて行き	同
國の母圍はれてると知らぬなり	同
夏の海母も泳いで見たくなり	同
妻の眼へいゝ晩酌になつて寝る	同
おなじ避暑 なつやすみ ならN・Y・K・O・L・I・N・E	大阪 山本 丹路
おなごの顔が仔猫のかほに を 似る夜	同
裾ひいて立てば藝者の壯麗な	同
海の砂が生んだをみなの手や脚や	同
はつ戀の頃を思へば馬鹿でなし	同
心配をしなと言ふても母の氣の	同
うたゝ寝の鼻に日本のたゝみの香	名古屋 花岡 堯子
二次會は同じ不平の友なりき	同

デパートを泳ぐをんなのセルの柄	同
五月晴れ日本中の鯉がはね	同
ふと父の年に觸れたる恐ろしさ	同
ため息も女給の戀の手管かな	同
普天氏から	
甘納豆行水の手につままれる	大阪 橋本 綠雨
洋酒に無錢飲食とは知らず	同
信仰に遠い街から來て拜み	同
道頓堀離れて見ればよいところ	同
椒濱キャシブ	
かどり火に四五人照すキャンプ村	同
宿代を仕末する戀みつけれ	大阪 大鶴 喜由
こうかつなのが好きあの娘この娘	同
健康診斷書まで交してまともらず	同
あんた憶病ねと年増ついと立ち	同
相性をしらべて戀をするもんか	同
激論に鼻を見つめて勝つてゐる	大阪 小鹽 靜路



裏切つて 振擢された椅子につき	同	くすれゆく 雲を眺めて ふとさびし	同
給料の順に 帽子も 並ばされ	同	二見浦 鳥羽は ボンヤリ 霞んで	同
商敵とする デパートへ 娘はつとめ	同	鉛筆を なめる 癖まで 小あきんど	今 月原 宵明
夫唱婦 隨して 根氣よく 値切り	同	亡妹一周忌	
もつとゆれもつと ^{おれ} 自動車は二人 ^{きり}	島根 竹下 章泉	焼増しをするのせんのと泣くばかり	同
念佛は 不吉なものにして 若い	同	外交の 藥の水を 所望する	同
人妻か そうか〜と それで 濟み	同	痴話喧嘩 裏は かぼちやの花盛り	同
山畫けと言へば 富士 畫く日本人	同	少女の 戀へト マト色 すぐ	同
子の 數を 問はれ 即座に 答へかね	同	標札の名前に 負けた 平長家	大阪 後藤 青兒
待たすのも 信賴させる 醫者の術だ	大阪府 丸島 利生	發狂を 堤の 櫻は 知らず 散る	同
母と娘が生きる 手段の 純喫茶	同	感情が 失れば 歩道 硬い事	同
はき〜と 女不平を 言つてのけ	同	先代の 肖像があり 舊家なり	同
心臓の 強さを みせる 中年増	同	眞裸子供も 眞似をして 座り	同
法學士 五十圓 也で 職に 就き	同	病んでから 親の 甘さが 悔られる	大阪府 米本貴志子
トロツコが 押せて 鮮人 職があり	大阪 松枝 靜波	連れる兒とおく子と 分けて デパートへ	同
さくらんぼ 戀は かなしきものにして	同	坊さんに 惜しい 如才と 顔を見る	同
受付で まつて た様に 叱られる	同	高野山 雜觀	



そんな椅子奪ひ合ふ間の晝寝かな

同

饒倅を希ふ心に隙ばかり

大連

大島 濤明

生きのびるパンを盗んでそれが罪

同

束縛をのがれて廣い我家なり

同

少うしは愚かにされて妻嬉し

同

蓄財にたけし彼氏のあぶら顔

大阪

市場没食子

貸家札家主の方も人を選び

同

子が出来て朝顔は水忘れられ

同

盜癖のあるとは見えぬ好い縹緞

同

人生は淋しズボンに縊があり

大阪

生田 翠夢

颯々と今日も女を張りに来る

同

夏蜜柑女の指を黄にそめて

同

言靈の國に生れて字を知らず

同

憎まれる役へ順番廻つて來

兵庫

酒井美知夫

グリーンピース酔ふる箸をからこうて

同

一人づゝ欠勤の譯きいてくれ

同

子の下駄を親の好みで買つて來る

同

薄化粧女房も捨てたものでなし

伯耆

森野 秀峰

遠足の仕度其のまゝ雨となり

同

先生もなげ足でゐるニギリメシ

同

ニワカ雨別れゝに軒を借り

同

飯ごつこ眞似も眞似たり母の癖

伊豫

門田 雨城

嘘でせうなどゝ嬉しいランデブー

同

給料が弱い男にしてしまひ

同

熱帯の花も咲かせて樂隠居

同

電線のどれが雀の親か子か

山口

三原 狂路

抱いた子の眼が動かさずアドヴァルン

同

御神木小鳥の群に無視されて

同

ゲーム取一時が近い聲になり

同

蝶よ花よと弱々しい子に育て

松江

梅本登美也

戀護る氣持義侠に似た氣持

同

前借はへらず三年立ちにけり

同

飲みつこに藝のない妓は自信あり

同

標語募集ますゝ聞い世の姿

堺

武田 柳昌



團體へ宿屋の旗がリードする	同	子澤山改札口に策があり	同
月給は惜しゝ嫁かねばならぬ年	同	自轉車が月賦残して盜まれる	同
今日の損暦のせいにして戻り	同	テームスも淀も酔醒おなじ味	大阪 鳴門觀潮樓
心配は母にかけまじラヂオ聞く	大阪 正本 水客	水垢で生きる金魚を羨みぬ	同
石垣のゆるみへ夏の草がのび	同	號令を掛けた自身も鯨子張り	同
シグナルは赤夕立がきそうなり	同	魂棚の下でシンミリした慄氣	同
鯉幟尾は傷心を打つ如し	同	繪にすればいゝ女だが醫者通ひ	今治 長野 文庫
愛情は清く淋しき秋風	松江 秋山 銀坊	親子程違ふ男に金があり	同
爪磨く姉を見詰めて寂しき日	同	サラリーを女姿にして仕舞ひ	同
遮斷機の前で遅刻を覺悟する	同	愛想が良く一生を小あきうど	同
朝からのラヂオ我が家のみな達者	同	第一期工事は化けた柳まで	今治 渡邊 曉童
まどろめば團扇の風を送られる	大阪 今村マリオン	先生の赤鉛筆は恐ろしい	同
連れてゐる子を差上げる人ばかり	同	春を惜んで筍を食ふ	同
辨當はボンボンが持つハイキング	同	子をだいて女房晩酌つきこぼし	同
傘を賣る方も濡れてる俄か雨	同	先きになり後になりしてハイキング	大和 嶋田 翠峯
榮轉に嬉しい友の泣き上戸	東京 岩井 四塊	昆布飴分けあふ汽車の差し向ひ	同
五圓紙幣夫が持つて呆氣なし	同	成長のあまりに早き絹糸草	同



プラットでヒヨコく歩く男の子	同	夏だけを副業にする水菓子	同
ズボンキツチり敷いて儲けは人のこと	松江	酔ふた晩目上に下駄を揃へさせ	同
又生んだらしい襦袢が乾してある	同	薫風の候殺される人殺す人	神戸 美岡 古城
一杯を逃げて友情無しとかや	同	笑つても泣いても同じ窓の月	同
編物にも倦いて隣の子を借りる	同	戀に勝つ爲の淋しい酒なのか	同
斷つた後姿が氣に掛り	廣島縣 芳 泉	一匹の蠅に寢付を邪魔される	串本 神田 晴一
女房の智慧は着物が減つてゆき	同	吸ひつけてウキの動きを待つとする	同
恩給の思ふことなし晝の風呂	同	水筒へ折々酒も仕込まれる	同
親一人子一人話跡切れ勝ち	同	忠告も素直に受けぬ氣のひがみ	大阪 小比加獨行
うちの嫁はんと口癖になつて言ふ	大阪 山田 菊人	平凡で居れる生活を感じて	同
酔漢のお辭儀を受けるパスガール	同	不平言ひ言ひ仕事のはかどらず	同
どの家が幸福なのか黒い屋根	同	一人兒死なせて	
テーブルの花を邪魔がる二人の眼	同	冷えきつた顔は市松の様になり	岸和田 藤井 芳文
稻光相合傘を浮き立たせ	尼崎 八竹 正柳	枕蚊帳今夏は誰に着せるのか	同
丸刈にすれば失戀かと聞かれ	同	孝行の心算で詠歌いつて上げ	同
會ふたのに蚊が出た話して別れ	同	同窓會ひけ目感じぬ地位で居る	大阪 青木 松月
飛乗りが上手に出来て怪我のもと	大阪 濱野 十歩	大阪に歸つて土産物を買ひ	同



遮斷機へまかせぬ命左右見る	同	よく似てる告白がある家庭欄	同
文明に背中を見せた城の石	尾崎 酒井 斗風	まだあとのつゞきそうな子は五人	同
口笛に河鹿は鳴いて山はひる	同	視線など構ふて居れぬ夜の女給	神戸 渡邊 木履
哲學者やつぱり街の灯をしたひ	同	鼻の差で負けた馬券を握りしめ	同
二男は皆なお古で元氣です	朝野 豊島 松女	假縫は首の短かい事も言ひ	同
次の子にまわし一着服を買ひ	同	寝てからの雨を知らないいゝ姑	名古屋 稻垣 正穂
温泉へ子供をつれて疲れに來	同	ダツトサン不幸の露地へ派手につき	同
大きくも亦小さくも借りられず	朝野 高原愚源太	晝飯を屑屋が覗く大掃除	同
損得を説くにいたつて爆發し	同	自分から邪魔者に成る妻の智恵	今治 矢野 公美
もう年でなどと逃げだす手を覺え	同	失戀をさすより外に道が無し	同
失禮ね肉體のメニューつくつてま	松江 増原比呂志	會へば又押の太さも相許し	同
紅燈の美しさ金を過信せり	同	初産に恵まれる	
時盗み疲れたズボンの角度なり	同	喜びの電話にふれて父となる	松本 石曾根民郎
母の眠に閑人多い人通り	大坂 山本 葉光	置時計忘れた戀をきさむのか	同
儲かりもせぬに夜汽車に馳れてゐる	同	月影におんな弱くも眉を描く	同
手を引けば按摩躰きやすくなり	同	麥いがの少し浮いてる貰風呂	松山 酒井 大樓
水臭い心を見せず世辭があり	名古屋 星野 兄兄	トラツクへ小蟹小蛙哀れなり	同



水族館 蛇の欠伸を見て歸り 同

日没の落着く際にある神秘 神戸 濱田久米雄

一言も語らず旅の驛へ着き 同

末つ子が歩き始めて梅雨が明け 同

瓦さへ見えぬつばめの視野となり 大阪 麻生 蕨乃

小金あり梅ほす事で夫婦もめ 同

蟬ジャン／＼梨が冷えてる井戸はきき 同

交番所部長が見えた叱りよう 尼崎 川村 觀月

計劃へ子供が生れ妻が病み 同

銃殺の積りが兵に兵に告ぐ 大阪府 宮岡 白峯

子があると知つてたら女給許す氣か 同

紹介所氣ながに待つと言ふとれず 廣島縣 松井 可笑

レコード發禁

非常時へ甘いリズムがしかられる 同

繪は繪なり人間は稍々ぎこちなし 今治 石崎 柳石

税務所が取らう／＼と憎くがられ 同

公園の春ブランコのきしる音 大阪 谷口 寒草

スラ／＼とニュースの係さしやべり 同

外交の責任額へ暮れかゝり 東京 阿部佐保蘭

サンザシの花を鏡へさしてみる 同

肥波が朝の靄から逃げて行き 大阪 坂本遠見路

影と共に躍る夜業のベルト 同

然り然りと同窓の猪口をくれ 大阪 磯野 峯月

誘惑に勝つて歸つて子守する 同

身二つとなつた女房の無理も聞き 大阪 高添 素朴

信號の赤へノツボーとどなられる 同

水際の蛙飛込一手あり 石川縣 高木鈴の家

とらわれて行くのをくも巢に見付け 同

宿替へ女房子供は先にやり 大阪 松浦 素峰

間借りまでするのも意見の相違から 同

同情は肩へ手をかけ言つただけ 京都 永井 占山

見送りの握手二三歩汽車と動き 同

手を引いて引かれて母娘犬を除け 大阪 濱口 七歩

言譯に詰つたと知る煙草盆 同



- | | | | |
|-----------------|-----|-------|----|
| 輪轉機 ニュースは瀧の如くすれ | 愛媛縣 | 武田 | 京司 |
| 榮轉を女房は泣いて見送られ | 同 | 同 | 同 |
| 怒つて電話へ小僧舌を出し | 大阪 | 宮内 | 廣々 |
| 喫茶店午前一時をバケツ提げ | 同 | 同 | 同 |
| 隊道の數を遠足覺えて來 | 大阪 | 辻 | 古杖 |
| クリニングしてる證據は糸の文字 | 同 | 同 | 同 |
| 運だとは諦め切れぬ女親 | 京都 | 小坂ふじ彌 | 同 |
| 附馬をつれて亭主はよい機嫌 | 同 | 同 | 同 |
| 文通がばれて悲しき便りくる | 神戸 | 難波陽出男 | 同 |
| 花もよし金魚もよろし夏の宵 | 同 | 同 | 同 |
| ブランコを朝鮮の子が占領し | 大阪 | 神谷 | 靜山 |
| よく笑ふわけを娘と言ひ切られ | 同 | 同 | 同 |
| 三等車賣られ行く娘のバスケット | 金澤 | 森田 | 白舍 |
| お茶碗がかけてるまゝの倦怠期 | 同 | 同 | 同 |
| ひと驛を歩るき今度はずりが出る | 愛媛縣 | 菊池 | 香方 |
| 旗を振りテープを投げて窓高し | 同 | 同 | 同 |
| 暗に咲く女田舎を想ひ出し | 神戸 | 櫛野 | 靜水 |
| 頼む席帽子を置いて用を立て | 同 | 同 | 同 |
| 父の居た昔がにほふ藏をあけ | 神戸 | 鈴木 | 九葉 |
| 妻若くアスバラガスと知る机 | 同 | 同 | 同 |
| 旅に居て母と同んなじ帯の人 | 大阪 | 北川 | 春巢 |
| 齒科を出てもう一度唾吐き直し | 同 | 同 | 同 |
| 遠縁のはし新聞に出た出世 | 愛媛縣 | 谷 | 心府 |
| 尺八が自慢の障子を開け放ち | 同 | 同 | 同 |
| 印紙はるに狡猾な舌さらけ出し | 神戸 | 小原吉左右 | 同 |
| 殿りに旦那が歸へる公休日 | 同 | 同 | 同 |
| 男の子強く生きよと母の乳 | 大阪 | 唐住 | 逸苦 |
| 先達がコース違へたハイキング | 同 | 同 | 同 |
| 始末にはならぬ雑誌の料理法 | 大阪 | 中村 | 靜城 |
| 荷物持つ母の呼吸を意識する | 同 | 同 | 同 |
| 孝行な娘へ重つて不倖 | 鳥取縣 | 林 | 小判 |
| 遠足の行きすぎてから水を打ち | 同 | 同 | 同 |
| 助かつた方一齊に昇給し | 大阪 | 坂 | 澄風 |
| 發起者は社長で社員双手挙げ | 同 | 同 | 同 |



蚊帳に波打つて寝安き夜となり 愛媛縣 矢野虹の鷹

ステツキをつく貫祿を認められ 同

戀は悲しい溜息となつて日が落ちる 大阪 立石 向治

吾れ一つ不孝をしたり近眼鏡 同

ほろ酔の橋廣くなりせまくなり 尼崎 薦野 雨聲

たつた一人小鳥の聲を聞いた森 同

昇給を日割になほし淋しみぬ 長野縣 高峰 柳兒

飛行機が野良に疲れた眼を誘ひ 同

さど波に戀の鼓動がゆらぎ合ひ 松江 池田榮之進

世辭云へばそればかりをたべさゝれ 同

意見とは名ばかり愚痴を言ひに来る 松江 松崎専太郎

非常時をかざしてノーチップで歸り 同

蓄音機鳴らし家賃は滞り 松江 小村 蘭蝶

手切金残り少く病みつゞけ 同

親方の太う長うに生きた顔 兵庫縣 田邊 由布

昇給で養ひ切れぬ子が並び 同

茶ぶだいをまわる子供をもてあまし 朝鮮 江田富峨山

挨拶は老眼鏡をはづしてし 同

人間の弱さ上司に詔つて 大阪 小濱 小貝

酒汲めば敵は少さく見える我 同

これが戀かと思ふ娘に擦れ違ひ 松江 奥井 抱月

戀去りて春の鏡へのびる髭 同

集金に春の思ひを中の島 大阪 シナ子

盛装は心齋橋でみんな降り 同

出張からマツチの數で歸るなり 松江 勝谷山川兒

背景は綠色なり貸家札 同

面白し個性に踵減つてゐる 廣島縣 都 子

人生はこんなものかと落目に居 同

アンペラの上のゴロ寝で食べる夢 朝鮮 末次三角山

金貸した上に心配したりして 同

野 外 教 練

水呉れた家の子へ劍を借してやる 兵庫縣 大橋井乃雄

村の子に嘘の兵隊さんと取巻かれ 同

機嫌よい兄に雅號で呼ばれたり 大阪 さい ち



蜘蛛の巢に朝露宿り 蜘蛛は留守

同

花電車港祭はかくて更け

同

本日休業勝手に御座候

大阪府

宮岡 公子

馬子の眼が物好きと見るハイキング

兵庫縣

荒木 天秋

妹の事を思へと母の口

同

職業野球團

ねぎられて貸した二階のきつい戀

大阪府

三浦秋夢草

年俸の投手に四球ばかり出る

同

町内の人に巡査は聲をさげ

同

病人のうわごとにも母又うるみ

大阪

宮川 冠光

あきらめは結局飲んで寝るときめ

鳥根縣

山内 凡愚

今のこと忘れて女髪を梳き

鹿本縣

寺田 宗正

ほこりする机に光る腕時計

同

長男五つとなれり喰くておそろしさ

鳥根縣

曾田 大朗

母の手へかへる赤子のよく笑ひ

山口縣

西口悲戀坊

妹の悲觀人形の鼻がとれ

松江

小村 蘭蝶

意見一致火鉢はなれた飲仲間

同

ホームラン子供の様を迎へられ

大阪府

黒川 紫香

金もてぬ男チャホヤさるゝ氣質

東京

安武 千九

麥の香に日ぐれの牛が又啼いた

鳥根縣

尼 綠之助

河童等の世界にプールなつてをり

同

二次會を逃げて女房へ鮓の折

大阪

今井 菊路

急 遽 歸 郷

特急も無情なりけり急ぐ氣へ

大阪

高磯 銀濤

使はれる身の悲しさよひがむまい

岡谷

林 幹

ふるさとを振返らせて汽笛の音

同

朝風呂へ母の用意は遅いもの

大阪

谷口 素岳

柳行李一パイの宿がへをする

神戸

山本 夢一

間貸などして話相手の欲しい後家

大阪

北野 紫雲

黄昏の街素晴らしいシンフォニー

同

腹の立つ妻超スピードでミシン踏む

大阪

山本 凡三

こびてゐる顔にマツチの灯がまぶし

鹿本縣

鳴 子

夏までに日やけさしたい無帽主義

松江

沖 須磨夫



古ぼけた團ボスター展のやう	大阪	宮内	廣々
棧橋でボーイ四五尾釣つて見せ	今治	富永	里子
洗濯が乾きやつぱり元の色	大阪	雨坪	山水
時報まで辛棒出来ず蚊帳を吊り	神戸	三崎	陽幸
生花の朝々水をかへて出る	神戸	奈落	
爪ひかる女の理智をかなしめり	名古屋	水田	蕪人
斷髪は枕のいらぬ寝相なり	大阪	井上一	劍坊
洋装のまだ獨り身といふ姿	大阪	庄司	淡路坊
嘔の娘の青春の目醒か薄化粧	廣島縣	谷本	宵詩
早過ぎる麥藁帽をまたしまい	大阪	山口	木守
竣工式自殺が出来る高さなり	田池	藤井	一東
女難だと易者に圖星さゝれたり	廣島縣	五連	發
よそ目には良縁とこそ見えにけり	東京	尾山	兎耳
にじみ出る涙眼鏡の下へ指	松山	芝田	靈子
何時もきちんと身だしなみをと丙午	島根縣	勝部	海棠
幻滅の悲哀あの岐の親に會ひ	長野縣	佐々木	千限
生きるのだそうだ力強く腕を見る	朝鮮	弘津	骨人坊

橋工事喚く鮮人泥の顔
足跡が僕より先にある渚
國道のドライブ砂塵を追かける
砂山は晴着の子らに見捨られ
酒飲んで後でハブ茶を飲むつもり
草木萌ゆ剃刀研いでもらひます

大阪 辻いの助
朝鮮 豊嶋石燈籠
朝鮮 村野東狂子
大阪 内田 有耕
石川縣 勝山しとし
豊池 善 朗

麻生路郎編著・柴舟漫露

累卵の遊び

定価 八圓
送料 八錢
合計 八圓八錢

四六版一六〇頁・國入・漫書三十二葉
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもり
で噛んで碎いて擲り餌にしたのが「累卵の遊
び」であることは著者の序文の一節である。
阪大川柳會編纂・路郎序

川柳 大川端

頒送 價六圓
費六錢
合計 六圓六錢

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集
である。(四六版二〇〇頁)
本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて
特に川柳愛好家のため頒布することにした。
残本僅少至急申込みあれ!

發行所

大阪市西區玉出 三丁目 三番地 不朽洞
電話 三〇三三 二九七五

りつつむ

と後れた大工鑿を研ぎ

川柳指導講座「手紙」

塚越正光

どんなに巧妙な辯解をしたところで、遅れた事實は儼然としてあるのだから、首の座へ直つたつもりでみなさんの、鞭なりお叱言なり又はもつさふげつない面罵なりをうけることにして、せつせと溜つてゐる句稿を片附けることに没頭しやう。

それにしてもこの「手紙」はいつごろのものかしらと集句の封筒の消印を見るに「一・五・一」となつてゐる。句稿の消印を見るに四月十三日から廿九日までのもので、これが發表される九月中旬までだと恰度六ヶ月になる近頃驕が本調子でないのは、みなさんの苦心の作品を半年も藏ひ込んだ天罰かも知れないと思ふと、つくづく空恐しいやうな氣もする。

みなさんの作品を見る前にみなさんの先輩はどんな「手

紙」を詠んでゐるか句集の中から拾つてみると

幸福であれと絶交書添える 三太郎
戀人は歸た時間まで書いて来る 雨の家
封を切るまでの氣持を裏切られ 比呂美
蹴を投げ出して羨ましい手紙 迷亭
置手紙顛へる手から手へ渡り 六疊坊
などと言ふのが目につく、これらを以下舉げるところのみ
なさんの「手紙」と比較するとき會得するところが多々あ
ることと思ふ。

父からの手紙に老を意識する

若しこの作家が大正末期から昭和期へかけての作家だつ

たらおそらくは「父からの手紙に老けたことを知り」と詠んだに違ひない老を意識するといふ表現に現代作家の呼吸づかひが感じられる、とは言ふものの字句の咎め立てをするやうだが、自他の混亂を何うすることも出来ない、手紙の文句に或は筆つきに老込んだ父を思ふ息子の感懐にまで發展させてこそ佳句が生れるといふ道しるべだけにして、敢て添削句を附さないことにする（句主 東淀川區 靜城君）

手紙にて苦境を知らし返事待つ

私達がある一つの事柄にぶつかつたとしても、それをそのまゝ句にしたのは事實の報告に過ぎない、例へばこの句にしてもこの事實を第三者の立場になつて見直したら、句としての價值を生じたに違ひない、この作家はその呼吸をまづ勉強することが急務であると言はなければならぬ（句主 東淀川區 小貝君）

此の頃の暮しも書いて來た手紙

第三者の立場で見直すといふことは取も直さず、この句のやうにある、これは苦境を知らせたのではない、むしろよい生活と見るべきだが、そのどつちにしたところで第三者の立場といふことには變りがない、たゞ文字の使ひ方から言へば

この頃の暮しも書いて來た手紙

とした方が感じがよいし句の味から言へば下五に難があるが、そこまでは無理といふものかも知れない。（句主 大

阪府 紫香君）

半狂の母も描いて置手紙

つまり作家は置手紙が発見されてから母の半狂亂を諷に描いて置手紙をしたといふところまで飛躍させなくとも半狂亂になるであらう母を想ひ乍ら置手紙を書くのかも知れないが、上五中七と下五の間に越されぬ溝があつて調子がないならかではない、想像でもいい半狂亂で置手紙を見る母の姿を描いた方が切實味があり相でもある。例へば

置手紙母の涙は乾ききり

ぐらゐなところで止めて置きたい。（句主 浪速區 南海男君）

玉章のかえしに來れば唯だまり

玉章のかへしなどといふ古風な表現で行くならあくまで古風に行かなければ損である。然し斯うした古風な情景は都々逸にまかせて置いた方がよくはなからうか、川柳の方では私達の先輩が「速達で呼んで顔みただけのこと」と端的に詠んでゐるといふことだけを知らせて置かう。（句主 大阪府 勝君）

無心狀中の文句のうまく書き

「手紙」といふ課題で作句するに當つて無心狀などへ聯想をはしらす作家にしては、叙法があまりに幼稚なので二度吃驚である、少くも川柳作家たらんと志すからには他人の句をもつと讀んで貰ひたい、そして上手いとか面白いとか

が判つてから作句にとりかかつて貰ひたい、この作家にも「無心狀漸く金のことゝ觸れ」といふ先輩の句を示して作例にするとしよう、(句主 山口縣 悲戀坊君)

良縁と言ふのへ手紙渦を巻き

作家自身にはわかつてゐても他人には何を詠んだのか判らない、従つて、私にも手の施しやうがない譯だが、文字の使いだけを訂して置くことにする

良縁と言ふのへ手紙うづを巻き

もう一度見直してみると何だかわかつたやうでもあるがやつぱり兜を脱ぐことにする句意を知らせて貰へれば幸甚である、(句主 尼ヶ崎 南濃路君)

久方の便りに母は泣き笑ひ

下五が『泣笑ひ』なのか『泣き』『笑ひ』なのかちよつと疑問をもつたが

久方の便りに母の泣笑ひ

であらうと解して置くが、慾を言へば上五にもう少し作意が欲しいとも思ふ。例へば『家出から』と言つたやうな……

(句主 島根縣 十九生君)

友の文今日も未納を取られたり

郵税未納の手紙は書面と同様に必ず届から書面より安いと切手を六錢封入して寄越すのは「岡辰押切帳」以來の常識だが、この未納は量目が超過した未納で、馬鹿々々しい中にも嬉しさを感じさせられるものである、この場合、

友なんて古典的表現でなく

友達の手紙未納を又取られ

でも作家の言はうすることは言へる(句主 島根縣 弘樓君)

あの頃は楽しかつたと古手紙

古い手紙から遠い過去の想出を繰りひろげることだけでも楽しい、それが楽しかつた想出なら楽しみの二重寫といふ譯だが、そこへ戀人の顔とか友達顔を描き出すことも、そんなに難がしい技術ではない、楽しみは一層増すに違ひない、それをすゝめることも私達のつとめだと思ふ。

(句主 島根縣 さわだ君)

一枚で書けぬ遺書が二通あり

作者は『遺書』を「いしよ」と讀ませる氣か「かきおき」と讀ませる氣かそれによつて筆の入れ方が……それほど大袈裟でもない……が違つて来る、私は「かきおき」の方をとつて

一枚で書けぬ遺書二通あり

とすることにする、何故なら「いしよ」の方だと「書けぬ遺書が」と口語體になつて下五との對がとれなくなるから(句主 京城府 奇文君)

熱い氣分で嬉しい返事書き

指導講座を卒業してゐる筈のこの作家としてはまづい句を作つたものである「氣分で嬉しい」も「返事書き」も窮

屈な感じでのんびりしたところがない、叙法の會得はいつてるのだから不可ないとの指示だけで充分と信じる、

(句主 天王寺區 葉光君)

頼りない腕に頼つて來た手紙

先輩の句に「お前様だけが頼りの假名手紙」といふのがあるが所謂同巧異曲でありながら私達にとつて來るものの違ひが感じられるのは、この句に大膽さが缺けてゐるからである、そこに勉強の仕甲斐があるのだから、作家よ悲觀する勿れである、(句主 兵庫縣 由布君)

氣に入らぬ手紙中途で引裂かれ

誰でも經驗すること正にその通りではあるが、私達はこれで能事終れりとすべきであらうか、恐らくみなさんも否と叫ぶことと思ふ。それなら何うすればいいかといふにこの手紙を書いてゐる人物を點出するなり、その人物の動作を描き出せばいい……動作は既に描かれてゐるといふかも知れない……人物を髣髴させる動作である(句主 朝鮮 東狂子君)

桃色の手紙なれどもらぶてない

元來が色つばい桃色だがこの頃の様に桃色がエロ行爲の代名詞になつてゐると、桃色の手紙といふ字句は、それを想はせるに充分である、そこで作家の意を體して

桃色の封筒ごつい字を書かれ

とでもするのだが、みなさんは肯なづけるかしら、(句主

高松市 柳夢君)

半分をかいて涙の一しずく

假に「手紙」といふ課題がないとしたら、板前はからしをかいたと思ふかも知れない皮膚病を病つて居るものは痒いところだと思ふかも知れない「かいて」を何のために假名にしたか解に苦しむ譯だが、これを

半分を書いて涙の一半

とした所で「手紙」とはきまらない。

置手紙涙の痕をにぢませる

ぐらゐなところが、句主の意を體して課題を詠込んだところである。(句主 朝鮮 松棲君)

嫁ぐ前型の様に書く手紙

縁談がまとまつた娘が手紙を出すことに……友達への別れの……きまつてゐるやうなこの作家の言分を肯定するとすれば

嫁ぐ前型の如くに書く手紙

だが、何うも私にはそんな習慣が呑込みにくい。(句主 朝鮮 石燈籠君)

以下の五句はこの集句中での佳句で、私が指導する要のないものである。その佳さはみなさんが自ら味はつて貰ひたいと思ふ。

下書きして悔状筆で書き

母らしい文句を添えて爲替が來
假名多き母の手蹟が胸を打つ
代筆て來る禮狀の墨が濃く
母宛の手紙は金の無心狀

三角山
源泉太
文庫
水客
幹

三 都 柳 壇 の 今 昔

明治新川柳 勃興時代

東京 高木角戀坊

明治三十六年日露戦争始まらんとする時代に舊派の狂句に呆れ果てた明治青年の企てが其七月日本新聞紙上に新題柳樽を井上劍花坊が擔當して始めたが新川柳のスタートなり其見本へ此當時の句には面白いのがあります。)

なきにしもあらず

高徳贈位なり

相撲好き先づ飼猫を

こつて投げ

忍ぶれさ色に出にけり

女學生

魚仲間死ねるぞ

鰯をよんで来る

劍花坊

午後三時永田町から

花が降り

花の雪此鉢巻の御不密か
哥薩克は曲馬の一手やつて逃げ

雪隠で唄をうたつて叱られる
久真岐 駄六

福音の歸りサア下駄がない下駄がない
令夫人乳母に來られて愚にかへり

おへん事おへんさ仲居腹を立て
三面子

放ち島鎌倉河岸の空を向き 飴ん坊
清盛を嵯峨野の奥で悪く云ひ 角戀坊

×

近頃の東京柳界

東京 高須啞三味

近頃の東京柳界に新人の殖えたことは驚くばかりである。僕などの觀察では、東京柳界空前のことであると思ふ。句會に集る人数では、或ひは近頃より多い句會が、昔にもあつたことばある。併し、それが大半新人であるなどいふことは、昔には考へても見られないことであつた。これを、言葉替へて言へば、昔の柳界は縁故者ばかりであつたのが、今の柳界は他人同士であると言へよう。それだけ、今の柳界は大衆的になつたわけなのだが、それが却つて古い川柳家を悲しませ寂しげらせてゐるのは面白い現象と思ふ。従つて、近頃の句會は昔の句會のやうに、參會者を豫定することが出来ないのは、句會當事者の、等しく口にしてゐる所で、それが柳界の大衆的なつた何よりの證據と僕は考へてゐる。

×

東京 塚越正光

足かけ三年目に歸つて來た、東京の句會でまづ驚いたことは、句會へ集まる作家の半分は私の知らない顔だつた。挨拶されたあとで傍にある友達に「今ののは？」と聞く「なにがし」さう聞けば雑誌の上では知つてゐる名で顔を知らないのが可怪しい位である。さうした作家達の主催する句會は二三通知を呉れるものもあるが私の知らない集りもある。従つて目下の所主催者の顔も知らない私は何處の會へも遠慮して仕舞ふがこれでは何時までもお顔を覺えることが出來ずに第一線から落伍して豫備、後備、

國民軍を追ひやられる私であるかも知れない。報告終り！

東京 福田山雨樓

○選者の披露振りが技巧的に洗練されてゐる。例へば先づ最初に「前拔、十秀、五客三才」と段階を示し「代つて十秀」「續いて五客」と間の手を入れ、「五の一、五の止め」と云ふ風にはつきり止めを指す。そして仲々名披露が多い。周魚氏などスローモーションではあるが一寸その比類がない。

○選者の披露ははつきりしてゐるが句主の名乗りは不明瞭なこと夥しい。聞いてゐてわかるのは自分の周囲にゐる人々だけ、と云ふやうなものもある。第一聲が小さく、不活潑である。或ひは一々賞品が届くのだからそんなに大きな聲をしなくてもわかると云ふつもりかも知れぬが。

○賞品には石鹼さか、鉛筆さか、又は臺所用品等家庭でよくこばれるものが多い。中には風呂敷で大きく包んで歸るものもある。

日本名所 名物川柳

(巻の都京)

山川紫明選
朝賀大鱗畫

(三) 金閣寺

金閣寺果報な雪の照り映える
義政の日記に映える金閣寺
戸が開いてどや／＼這入る金閣寺
雪姫の縄を噛み切る嫁が君
南天の柱茶室の寂びを見せ

紫葉
進示朗
無折
竹雅
翠光



明治大正時代の 京都柳界に就て

京都 齋藤 松憲

明治末の京都柳界は藤本蘭華君、石田静波君などを中心にして時として當百君などを迎へて句會を催し時に一二の雜誌をも發行された事ありしも、殆んど京都川柳社に依て統一されたるかの感ありて、無事大平を謳歌せしもの如し、詳しくは當時柳界を離れつゝあり僕の如る所に非ず。

大正七年に至り偶々劍花坊氏の入洛するありと僕も共に京都川柳會に出席するの事あり、これを機會に柳舟、六好孤山其他の諸君と相知るを得て「紙衣」を發行す、其句風や、當時にありて新傾向と目されこれより京都柳界も七分八裂するの動機となり「擬寶珠」其他の新人續々として出現「紅椿」其他の新興勢力擡頭の因を爲し、幾多の新團體の起伏するありて、最早、昔の如き統一を許さず今日に到る、今後の京都柳界も亦新興と古典的柳人の對照を暫らくは續くるものなるべし。

日本名所

京都の巻 選者 山川 紫明氏
(八) 五色豆 締切 十月五日
(七) 五色豆 締切 十一月五日
投句は本社宛 用紙ハガキに限る

名物川柳を募る

金閣寺 昔の事に觸れるなり
金閣寺 信心で行くところなし
團參の疲れ金閣雨となり
算盤ではじき兼ねてる金閣寺
金閣寺 雪をきれいに積もらせる
金箔を僧は見あきた手で觸り
義満の榮華が褪せた金閣寺
茶に趣味を持つ同士だけ金閣寺
國寶の屋根を映して鯉がはね
金閣寺或日維持費のことに觸れ
義満を氣取つた聲へ鯉がはね
寫真機を叱る小坊主 京訛り
金閣寺 此處で盃なめたがり
☆
内田有耕

近頃の京都柳界

京都 山川 紫明

○京都が全國に誇り得る川柳聯盟では立派な過去帳も出来上つて今年も又九月二十三日に盛大な川柳忌が催されるのは心強い事です。

○京都川柳社では今秋の廿五周年記念大會を目前に控へて目覺ましい活躍を始めてゐます。

○自分等の川柳街が廢刊されても知らぬ顔であつた無冠王氏が今度同人社を創立して同人誘致に夢中に成つてゐる外は到つて無風状態で若柳を御所車と改題した真之祐氏の一派も力強い新作家をぞし／＼増やしてゐるので意義あるものと成つて來ました。

○其他に健全な川柳ビルがあります。

○個人として川柳聯盟の爲に日夜努力されてゐる佐一郎氏の勞を特筆したいと思ひます。

×

京都 平岩 司郎

一、近頃曉の街の狼人狩もあつて漸く京都の寂を破つて「同人川柳社」の創立さなりました之が如何なる挾撃を初めるか、雑誌が出来たら解るのだとの事です。

一、それから「京」ですが、猛烈なフアシストの擡頭でして、川柳人であり乍ら江戸を知らぬものは、國賊なりです。よ何でも國賊ささへ言へば終ひですから話になりませんし、忘れちゃいやよと聞いてゐるより「アンダンテカンタビール」を聞いてゐても國賊ではない筈ですが、おつかない事です。

一、それに「御所車」と言ふ柳誌が「川柳」は「川柳」を作つてゐる、それで「えい、じやないか」言ひ乍ら「それ大會だ」それ「一周年だ」とやつてます。

一、で川柳ビルですが、昨夜同人宮田甫三が憂鬱な顔をして宿直室に現れました、此の人の沈滞した姿が川柳ビルの空氣を代表しましてねこまつてます、けぞ野球チームを作つて見るこやつぱりまこまつてます。

一、近頃の京都柳界も熱はありません。若い人が皆「若年寄」でおさまりますからね、僕だけでもわかりませんが、なさけない事です。

×

京都 大島 無冠王

數年前の京都柳界、或は十年前の京都柳壇に比較して、近頃の京都柳界は質に於いては向上し、量に於いては全く沈滞期にあるやうである。近ごろ句會を見ても通例三四十名を算す程度の減り方、併も私達以上の先輩の出席は又三、四名を過ぎないといふ始末、大家先輩連果して如何うしたことか、殆ど私達級の選者のみ也とすれば、果して京都柳界これでもいいのか。現在選者級の力不足といふのではないが、いゝ先輩の奮起こそ柳壇を新進作家を善導し活氣を興へ、以て往年の殷盛を再び爲さしむるものだ。と私は信じてゐる。此度、私達が川柳同人社を起したのも、一つは斯やうな處にも發してゐる。現在の京都柳界に對し何んの不満もないが、大家先輩諸賢の奮起を甚だ僭越ながら要望したいと思ふ。

明治大正時代の

大阪柳界

大阪 木村半文 銭

明治——と言つても先づ三十六年頃が最初で、六厘坊、七厘坊の擡頭時代である。

これは申す迄もなく狂句時代で、眞に川柳に目覺めて狂句と分離したのは明治三十八年頃である。だから

狂句時代——明治三十六七年頃

川柳時代——同 三十八年頃以降

と見て大差はない。然し、嚴密に言へば三十七年と同八年初期とは川柳、狂句混沌時代たるを免れぬ。その意味で狂句から川柳を文學的に認識しかけた明治三十八年度は大阪柳界にとつて祝福すべき紀元にあたるこの川柳時代をつつとつて來たが、大正十二年に新興川柳が出現して、川柳の中から亦別個の新しい文學的視野を開拓しただから、大阪に於ける明治、大正年間には川柳界にとつては、波瀾に富んだ歴史であつた。第一は狂句より川柳を分離し、第二には川柳の既成意識より新興意識を分離した

のである。

近頃の大阪柳界

大阪 岸本 水府

大阪にも澤山の柳誌はあるが、その中にまづ、熱の川柳雜誌、勤く昭和川柳、研究の三味線草、勉強の番傘、この四つが川柳の重き使命の下にそれぞれの分をつくして働いてゐる事が何よりの力強さであらう。涼み床凡の四人男、おのおの違つた方をむいてゐても、浴衣の柄はよく似た姿、話せば大阪訛でせう。

大阪 森 雞 牛 子

近頃川柳青年の元氣はすばらしい。黨派に囚はれず横の運動に携つて來たことは著しい現象である、將來指導精神の鈍い吟社は自滅することだらう。一方齒の浮くやうなロマンチックの句や生煮の生活句が誌上に潤歩してゐるのも御時勢であらうか柳味

がだん／＼減じて行くことは決して喜ぶべきことではあるまい。亦句會も、番傘あたりは大分頭をひねつてゐることはうなづける。締切後撰者を發表するなどは所謂あてこみ防止の上から見ていいことであると思ふ。それと作家即ち創作上の立場から古句研究家の生れないことは今後指導の地位にある人の一考を煩はしたい所である——もう一つ先輩が少し頑張りが足りない。

ヴァイオリン教授

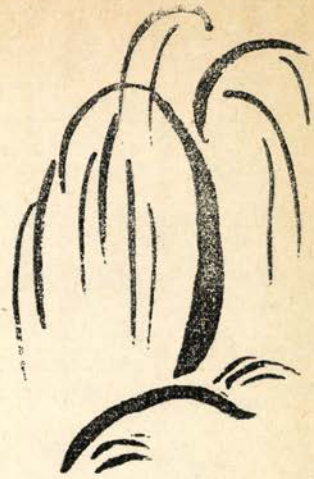
講師 辻吉之助先生

毎週(火)(金)午後六時

大阪四ツ橋南

日本樂器株式會社大阪支店

(詳細は右へお問合はせ下さい。)



武玉川二篇研究

(二八)

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(683)

人 礫 う つ 浪 人 の 夢

省 二 礫の如く人間を軽々と投げ散らす夢とは、流石に浪人しても昔を忘れて居らぬ。浪人して居るが故に、そのやうな夢もみるのである。

東 魚 〓「人礫うつ」で、常に捕手などを警戒してゐる事が想像される。或は人礫を打つ様な大手柄をして、(供先の狼藉者でも取押へるとか)立身したいと思つてゐるであらう。後者の方が可笑味があつて面白い。

秋の屋 〓 脾肉の歎である。

(684)

立聞にやり手は 鎧を握り詰

省 二 〓「錫杖の音をやり手は腰に下げ」で、監督役として鎧を、がちやつかせて居るのであるが、自分の悪口でも言つて居る氣配なので、鎧を握り詰め、音せぬやうにしての立聞。

東 魚 〓 無意識に鎧を握りつめてゐるのが、遣手だけに如何にも面白い。自分の悪口なり、おだやかならぬ相談あり、何れにしても、やり手の捨てゝ置けぬところ。

秋の屋 〓 遣手に鎧は、武士の刀と同じく、腰から離す事の出来ぬものだから、立聞をする時にも、無意識にこれに手に握るのである。

(685) 大僧正も材木を問

省二 寺普請をするに就て、大僧正自ら用材の事共を尋問したのである。

東魚 恐らく前説のやうな事であらう。無我な頓着なさうな、風貌をしてゐる大僧正も、自分の伽藍建立には流石に材木は樺か檜かなど、關心を持つと云ふのであらう。

秋の屋 江戸時代には、大僧正でも俗僧があつたから、算盤をも弾いたであらう。

(686) 棹ぬく跡にきりくとうづ
省二 寫生句。

東魚 巧い寫生である。

秋の屋 斯う言ふ處に着目するのは、平素の心懸によるので、心無き者はこれを見逃してしまふ。

(687) 懸乞歸る向ふから春

省二 掛乞も二三丁ほど春をふみ。ぎりぎり迄やるのが掛取の役目。下七可。

東魚 「向ふから春」は、大まかな言ひ方で、紅戸人にうけさうな句法である。

秋の屋 「後に來る春」などゝしては、興味が薄くなる

(688) なみたぬくふて袖の片笥

省二 袖で涙を拭ふた處に、着物が片方へ寄つたのだ

片笥の参考句「片笥に着て昔なつかし」(武八)

東魚 事實をとらへて、哀れさを表現し得てゐる。

秋の屋 事實かも知れぬが、少し誇大のやうである。

(689) 子の扱いの下手な連歌師

省二 和歌から脱して滑稽洒脱の一風を成したのが連歌であるから、連歌師は氣さく者でありさうで、案外子供の取扱ひ、お相手が下手。

東魚 俗な連歌師と雖も、世捨人らしい生活をしてゐるのであらうから、子の扱ひなどは下手でありさうに思はれる。面白い句である。

秋の屋 連歌の句案に屈托して、我子の撫育を怠るといふのではない歟。

(690) 五條の橋て安い主從

省二 辨慶ほどの者であつたが、あの五條橋上にての牛若との主從の縁結は、なんと手早い事よ。

東魚 「安い」は手輕い意である事は、前説の如くであ

るが、本來は命がけの交渉だ。そこに朗かな可笑味がある
秋の屋 謡曲の「橋辨慶」でも、主従の契約は手輕に結ばれてゐる。

(691) 久しい先の奉加帳出る

省 二 奉加帳は今日の寄進帳。昔の奉加帳が出てきて追回して居る。——奉加帳の句例。『あの世から此世をねらふ奉加帳』(武十七)。『七堂も根は白紙の奉加帳』(あづまからげ)。『戒名も宛字交りの奉加帳』(武十七)

東 魚 彼は何兩出してゐるな、彼奴は一分も出してゐないなどと微苦笑のところであらう。

秋の屋 奉加帳は多く神社佛閣に、關係の有つたものであつた故、甚古いものが保存されてゐたであらう。私は本所の五百羅漢の古奉加帳で、詐欺に懸つた事が有つた。

(692) 水仙の舟は入日を漕流し

省 二 水仙は冬季のものだ。入日を急ぎ漕ぎ流しゆく
東 魚 短日の頃であるから、水仙畑から採集して、市へ送らうと舟でやる頃は、夕日の中をゆくやうになる。

秋の屋 房州邊の海岸の光景と思はれる。

(693) 田の中を蝶くも飛文も飛

省 二 「蝶々もとび」から「文も飛び」を考へあぐむ
だ上で、吉原關係の句かと、にらみしが如何。

秋の屋 淺草田圃の光景とも、解釋される。

東 魚 蝶も飛び蝶も飛びちるのだが、見る人によつては、紋とも思へるのであろう。『菜の花にあれみや主の紋が飛』もある事だから。但、「田の中」がチト變になる。

(694) 名もしらで何かうれしき生青

省 二 鮮魚は爽かな感じのする、好いものだ。(その魚の名を知ると、知らざるに係らず) 此の句では「名も知らで」に興味を深めて居る。

秋の屋 昔は冠婚などの場合に、鮮魚をよく贈答したもので、中流以上の家々には肴籠といふ物を備へて置いたが今では夫れが廢れて、肴籠を知らぬ人が多い。

東 魚 交ぜ肴で、色々な鮮魚を取合せて、祝物にする
盤臺も用ゐられたやうに思ふ。

省 二 魚屋にさへ肴籠をみない。今、辭典をみると、「なま魚を入るる粗末なる籠」と出て居るが、決して粗末

なものではなく、拙家にあつたものなど、相應に金を掛けた品である。

(695) 横平に念者の手紙むつまじき

省二 男色關係だから、横平であつて——あればある程——睦しさが、文面に現はれよう。『むかしの念者今に横平』(武・十)

秋の屋 男色關係者は、多く田舎武士であつた故、その艷堂の文句も、自然に驕傲であつたらう。「横平」は「横柄」の當字で、また「大柄」とも書くのである。

東魚 横平に——睦しき」と云つたのが、ヤマである。

(696) 始からはづす合點のとしわすれ

省二 『明日までは利口のいらぬ年忘』。始めから脱線しケタを外す心組みなのだから、心残りなく年が忘れ得よう。

秋の屋 「はづす」は桁を外す、羽目を外すといふ意であらうが、少し語が足らぬと思ふ。

東魚 可笑味がある。言葉は足らぬが、そこに洒落氣

もうかがへるかと思ふ。

(697) 篠をつく降に戸板の年か知

省二 土砂降にあわて、戸板をひく、防ぎ得ずして雨に降りつけられる。時代物の戸板だなアなどと騒ぎ笑ふ。

秋の屋 古い戸板の朽ちた所から、大雨が漏るので裏長屋などの光景であらう。

東魚 降らぬまでも、年の知れてさうな、古戸板と思はれる。

川柳趣味展覧會

九月二〇日 自午前九時
至午後九時

於 大名町 鶴林堂

主催 川柳松本しなの吟社

石會根民郎



柳言餘滴

川柳でどなり込まれた話

池 澤 丈 雄

往復は有廣の紳士雑役夫

此れは、私の勤めの片手間にやつてゐる雑誌「笛」の川柳欄に載つた麻生先生の選句であるが、ゆくりなくも、此の句で、私は馬鹿らしい目に遭つた事がある。

それは、私の會社の雑役夫が端なくも此れを見て「馬鹿するな、雑役夫は背廣服を着たら悪いのか」と怒鳴り込んで來たのであつた。作者にして見れば頗る迷惑で、決してそんな氣でからかつてやれ、と云ふのでは無い事は明かであるし、私とても何の氣なしに「面白い」と思つたまでの事、それをこんなに捻ぢ込まれるとは、まさに失

笑、苦笑ものでしか無かつた。が、とにかく此の雑誌が私の會社で發行されて居る關係上、理由の判らぬ者には幾ら説明しても駄目だと思つたので、私は面倒臭くなつて、「それはどうも編輯者の手落ちであつた」と詫びて、何うやら此の事は治つたのであるが、後で考へるとどうも残念で堪らぬのである。平常の目に觸れる事象の中に何か諧謔は無いか、素つ破抜きは無いかと苦勞して一寸したポイントを掴んで生まれるのが川柳の良さ、素つ破抜かれた者は「彼奴、うまい事を云ふ」と願を撫ぜれば済む、其れが川柳の「イキ」である事は、云ふ迄もない。こんな事

は馬鹿らしくて涼み話にも成らぬが序に一寸書いて見た。

跳べよ蚤同じ事なら蓮の上

此れは有名な俳人一茶の句であるが私は、此れはむしろ川柳の名句として取り上げたい。一茶は、大きな人間の指に追はれ、逃げてゐる蚤を見てそう感じたのであるが、此れは不幸な我が身を對照として弱氣な人間生活に迄喰ひ込んで來る。俳句は、自然の風物事を詠むが川柳は世俗の血や涙や汗を取り上げる。其の本然に於ては變りもない。俳句には季節だの何のとやゝこしい約束があるが、其の點川柳は樂である。樂であるだけに、それでは何を掴まうかと云ふ苦しみ面白みがある。「歸らうぞ花も見飽いた飲み飽いた」「此所いらがよい歸るさよ花の旅」此れは、故坪内逍遙博士の病床吟であるが何んでもない此の十七字の羅列の中に含められた切實感、而も浪漫的な詠歎は如何か。人生を花見に譬へ、もう充分に生きて來た、何日死んでもよ

いぞ、と云ふ博士の心境を羨ましく思はない人が何人あるだらうか。も少し花を見たい、變つた酒を飲みたいとすればかりを念じて而も見られず飲めず「歸りたくない」人達で世は埋まつてゐるのでは無いか。而し、考へて見れば其れも亦佳し。世の總てが満足し、達觀して死ねばお坊さんは喰ひ上げである。宗教なんて活字が出来て來ない事になる。

酒は飲むべし飲むべからずと親爺飲み此れは拙作である。

★

池澤樂居氏は私の伯父である。膝をつき合はせて話を聽いたりする様になつたのは、つい五、六年前頃からであるが、私は此の人には實に感服する。つまり、人の良い圖々しさと云ふのか誰とでも話を合はせるのにずい分感心する。「私には餘り趣味があり過ぎて果して貴方の趣味はと、問はれると自分乍ら判らない」と或る隨筆の中で書いてゐられたが、私も尠くともそうあ

りたいと願望する。趣味も轉じて「たつきの道」となれば嫌になるに相違ないし、第一、苦痛になるだらう。乞はれるまゝに川柳人となり、俳人となり得る、それは素より生活とは何の拘泥もない、そんな境遇に居られる人が一番幸福だと思ふ。

俯向いて水鳥を見る二重橋

と、此れはいつか私に示された樂居氏の句であるが、嚴密に言へば、此れはどうも川柳としては不味いと思ふ。

がそれでも好いのである。「此の位の句なら俺だつて」と云つたつて、仲々其れの出来る心臓の強い人が尠いのだから、さすれば所謂良心的なる言辭も或る種の人間には極めて態の佳い「世迷ひ口上」とでも云ふものか。

餘談に亘つたが、此れも柳言餘滴として見逃がして頂かう。

★

私が中學の一年生位の時に、講談俱樂部や何かの川柳欄で、選者としての麻生先生のお名前を見たものであるが

それが何日の間にやら雜誌のお交際いなどする様に迄、私が老人になつて了つた。私のやつてゐる雜誌では若い人達ばかりであり、外へ出ると皆、先輩の方々に話す。そこで年長の先輩に教へられた事を、私は若い人達に受け賣をするのであるが、若い人達に云はすと、私を利用して居るのであり、私は又、先輩の言動を利用する、此れが知らぬ間に繰り返されて若者は一人前になる。「何を、あんな老人の言ふ事など古い」と貶して居るのが、さて自分が老人になると、そんな事なぞすつかり忘れてゐる。私の様に兄妹の澤山居る家では、着物も、教科書も皆、世襲制度で、「一度位ひ新らしい教科書を使ひたい」と泣いた子供時代も、自分に息子が出來ると又、そうするのが世の習いである様だ。

残りものを勿體ないと

親が喰ひ



金戒光明寺の 虎の繪 (隨筆)

高尾亮雄

ことしの六月十九日、忘れっぽい都會人でも今なほ記憶にのこる日蝕の日であつた。私は京都黒谷の金戒光明寺の本坊に東京の久保田金僊氏を訪れた、氏はその月の初めごろから、この寺に滞留してゐるのだつた何んのためか、こちらは知らずに行つたのであるが、訊くと、父米僊氏が明治二十年この寺に久しく滞在した井に龍の畫とその室の襖の虎をかけた、これは知る人ぞ知る可なり有名なものであつたが、昨年の本堂方丈炎上の砌り畫も烏有に歸した。本堂はまだ建たないが方丈だけは最近竣工したので、昔の因縁から二代目の金僊があとを襲ぎ、昨日を以て漸く書上げたところだといふ。

金僊氏に案内されてその室に拜觀にゆく、なるほど四間に三間ばかりの折曲り兩面の金襖に大きな虎が五頭、反對側の廣縁に面した障子の腰張りの襖には竹石と小川の流れにセキレイがあしらつてある、畫は仲々見事だつた。

父の米僊翁逝いて丁度この日が三十回忌、管長の郁芳隨園大僧正に懇な法會を營んで貰つたのだと金僊氏は満足、大よろこびらしかつた。

さらに、虎の室の隣りが柳の室といふので、これは京都の畫家故今尾景年畫伯の筆になつたもの、同じ時に焼失してしまつたので、その令息景祥氏が同じくあとを襲いで、最近書き始めるとのこと。

二つの室を二組の畫家父子が相襲いで書くのは因縁ぶかい美事であり一寸ニュースになると思つてお寺の電話をかりてすぐ大朝の京都支局へ報せてやつたが、京都版に掲載されたかどうが大阪にゐるものにはそれは分らぬ、その電話をかけてゐるさ當本山の執筆らしいのが傍に来て、どうぞ大毎にも報せて下さいませんか頼まれる、私は一寸困つた。

× × ×

それから日が経ち、この八月のお盆に大阪天王寺の紅葉寺に魂祭の子供會があつてお参りすると、玄關の正面に大きな貼札がある「一金六千五百圓也——右紅葉寺割當負擔本山へ上納す可き者也」と黒谷本山から末寺への御達で、さらにその寺の檀家に示すためのものだ。とても大金額の上納金ですと和尚に話すと、和尚は笑つて應へず、何んでもこんどは數十萬圓の再建費らしいが、あの五頭の虎の繪もその中のものかなと思はれて金戒光明寺の金襖の光りがあります——輝しい。



「氣違ひ」を語る

沖野 岩 三 郎

氣違ひと天才との區別をつけることは非常にむづかしいのであります。おかしい話でありますが今までにおいて、私をいぢめた者は大部分死ぬか、病氣になるか、氣違ひになつてゐます。私をいぢめて死ぬか病氣にならないものは氣違ひであると思ひます、世の中がさう出来てゐるので御座います。

私は今はこんな丸坊主の變な格好の禿頭ですが、昔はこれでもふさふさとした毛があつたのです。ある時ふと丸坊主になる氣になつて理髪店から家へ歸つてくると家人のものが笑ふだらうと思つてゐると少しも笑はないで私が丸坊主になつたことに氣付かずにあるのです。二三日たつて家内に俺は坊主になつたんだぞと云ふと初めて氣がついた様なわけで、大笑ひをしたことがあります。それ程私の頭には毛はあつてもなくてもよかつたのです。さて私の友人の理學博士がお膳を買つて來たがどうも漆の臭ひが強くて嫌だから何んとかして臭ひを除る工夫が

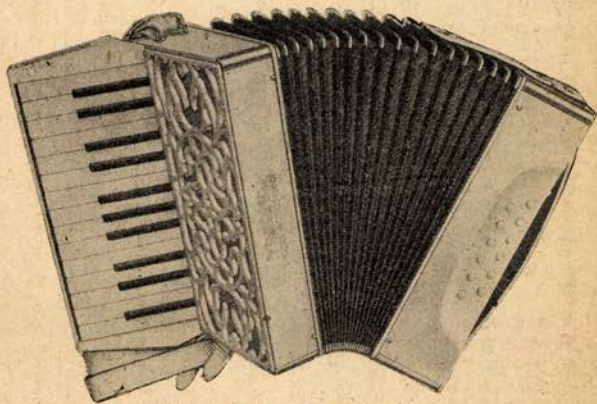
ないかと或人に尋ねたところが、あつてお湯に一晩浸けておけば直ぐとれると教へてもらつて、早速自分達のはいつた後で風呂をあつく沸かしてお膳を一晩中浸け、翌朝取出して見ると何んとお膳がバラバラにこはれてしまつたといふのです。この話を聞いた時その理學博士がこんなことをするのは或は氣狂ひぢやないかしら、といふ様に思ひましたが、さうではなかつたのです。人間は時々こんな氣違ひじみたことをやるものだと思ひます。それから之は親類のものの話ですが入營する時二年間の小遣ひとして母親が十圓渡したところ除隊の時近所の土産まで買つて三圓の釣錢を持つて歸つたのです。詰り二年間に七圓しか費つてゐないことになりました。これは聯隊で初めてだといつて非常な模範兵だと云はれてゐたが、その後遂に氣違ひになつてしまつたのです。なぜ氣違ひになつたかと云ひますとする事が總て軍隊式で規則正しくあまり眞面目過ぎて、すばらな我我から見るとどうも様

子が變だといふので鑑定してもらつたところが、やはり氣違ひだといふのです。あちらから見れば我々の方を氣違ひだと思つてゐるかもしれません。が兎に角氣違ひ病院へ三箇月ばかり入れて大分よくなつたので退院さして私が面倒をみて居りましたが、ある深夜私が原稿を書いてゐると隣の部屋に寝てゐたその男がスウーと私の部屋へはいつて来て、いきなり後から當時房々とした私の頭の髪をグツと鷲つかみにして上へ引つぱり上げましたのでびつくりしてしまひました。わけがわからないので、その男の顔をぢーとみつめてゐましたが「そこへ坐れ！」と云ひますと命令通り手を放して坐つたので、どういふわけか、と理由を問ふと、口に手をあて「言へないといふ動作をするので、私はペンと紙を出して筆答させましたところ人間には二つの種類があつて、一つは眞四角な人間であり、一つは三角な人間であるといふのです。そして世の中は三角な人間ばかりで自分のやうな眞四角な人間がゐない。髪の毛をつかんだのは睡眠中何者かゞやつて来て自分の頭の毛をつかんでふり廻す、その時魂がぬける様な氣がしたがその男が酒を飲むか、ばくちを打つかと尋ねるので、飲む、打つ、と答へると許してくれたので私の髪の毛をつかんでひつぱりまはすと自分の疑問が

ヤマハ アコーデオン

- 10號... ¥10.00
- 20號... ¥17.00
- 30號... ¥23.00
- 40號... ¥28.00
- 50號... ¥40.00
- 60號... ¥60.00

カタログ送呈



60號 ピアノアコーデオン

山葉ピアノオルガン製造元

日本樂器會社大阪支店

大阪市・西區・四ツ橋南

電話 新町一〇七三番



解決すると思つたといふのです。それから又或時道を馬が塞いでしまつて通れなかつた。

馬方が馬をつないだまゝどこかへ行つてしまつていくら馬方をよんでも出てこない。大變困つてゐるとその男は馬の腹の下を四つばひになつてスウーとくどりぬけてしまつた。びつくりしてゐると向側から通れくんと云ひます。どうも恐はくてそんな眞似も出来ないでゐると「少しも恐くないよ」といつて二三回馬の腹の下をくどり抜けました。その時私はつくく氣違ひでない悲しさを味ひました。

今では郷里で世間の人も交らず君子の様な生活をしてゐます。一見して氣違ひといふ様にも思へませんが、たゞ一つ違つたところは、形も大きさも同じ石を積み重

町・横・柳・川

☆ スモカの片岡社長
夜の十二時に、カー
テンを下ろし、レコ
ードを懸け、五〇錢
で買つた指揮棒をふ
つて世界的バンドを
指揮するさうである
が、その快味は想像に離くない

☆

編輯子が三越加工のステッキを抱えて川柳愛讀者の蘆屋夫人K女史に會つたら、いきなり、「センセイは足がお悪いんですか」と聞かれる。「どうしてデス」「デモ杖を持つてらッしやるもの」にはヘコ垂れ申候だ。あゝ三越よ。三越よ。この不名譽をそいでくれ。

☆ 前號で甚しい誤植があつた。

ねて丹念に石垣をつくつてゐます。その石の中に一つでも氣に入らない石が交じつてゐると全部崩してしまつて又新にやり直すのです。私が原稿を書く時はどうせ私の様なものゝつまらん小説は誰も讀んでくれないだらうと思つて少しぐらゐ悪いと思つても面倒くさいからそのまゝしてしまひますが、一字一句もおろそかにせず、頭をひひにねつて考へて少しでも氣に入らないところがあると又書直すといふ様な事はどうも氣違ひでないと出来ません。世の中は氣違ひか氣違ひでない様なわけのわからん人間の寄り集まりであると思ひます。つまりこの私の氣違ひの話もつまらない、なんだか氣違ひじみた話であつて沖野はひよつとすると氣違ひぢやなからうかといふこととであれば私の話も成功です。(談)

山本丹路が山本丹路になつてゐた。確に校正した筈の校正子がその罪を問はれる。俗に役トクさいふ言葉があるが、コレなどはおそろくその反對だ。

☆

コレは一寸内緒だが、機見女に「社長」と云ふニックネームを奉るこゝにした。これで川柳雑誌社には社長が二人出来た譯だ。ホンモノの社長がドシ／＼さ夥しい。(不死鳥)



川柳オリピック風景

森 東 魚

聖火リレー

「火廻はし」のていで聖火は運ばれる

一喜一憂

勝ち負けに泣く日本を不思議がり

ヒットラー連日臨場

座頭らはハイルをあびて席に席き

吉岡選手惜敗

吉岡の負けコンバスの愚痴になり

黒人活躍

碁と別な黒の強さに呆れ果て

超人オウンス

黒施風オウンスとこそ名付けたれ

村社選手奮闘

村社は寄らば斬るぞのていたらく

中跳三等田島選手

これからだ見てと巾跳び旗をあげ

西田、大江兩選手の友情

伯林に早慶戦はなかりけり

三段飛び優賞

ホスチャンプ八艘以後の膽を消し

マラソンの本望曾我の上を行き

水上の百は空き巢をしてやられ

水上百米

比島の兩雄、陸にトリビオ落ち

水にイレルデホンソ落つ

あとつぎの出ない老舗を哀はれがり

バタフライ泳法

プレストに騒々しいのが一人居り

前畑選手優賞

只泣けてく優勝臺に立ち

水上再制覇

キツパスに腕を組ませて暮が下り

(昭和一一・八・二〇)

お寫眞は!!

藝術的で
大衆向きで

きつと皆様の

お氣に召す……

工藤清寫眞館へ

朝日ビル一丁南・肥後橋
電 土 5 5 5 0 番

川柳人協會にお入り下さい

川柳人協會はホントの川柳を社會に弘く知らせるため、川柳の愛好者がお互ひに仲よく手を繋ぐために生れた横の運動をするのが目的です。従つて協會の總會は全国各地で次ぎ／＼に開會され、斯界の大家が出席して講演や句作によつて向上發展を期する一方、相互の親睦を圖る機會を作りたと思つて居ります。川柳人協會が主體となり各地吟社の共同後援で大會なども開きたいと存じます。

會員は毎月「川柳雜誌」といふ柳誌を配布される外、諸會合に際しては會の性質により入場料の割引又は免除、其他いろ／＼の特典を受ける權利を持つてをります。入會は誰でも何時からでも出來ます。申込書に會費一ヶ年分三圓、半ヶ年分一圓六十錢を添えて協會へお送り下されれば正會員章をお届け致します。送金は振替（大阪三一五一四）を利用して下さい。一番安全ですが、小爲替が郵券（二錢以下）でも結構です。御友人にもおすゝめ下さい。

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

川柳人協會

理事長

電話 天下茶屋二五七九番
振替 大阪三一五一四番

麻生路郎

◆今までに（川柳雜誌）を月極又は半ヶ年極で購讀してゐられる方で入會を希望される方は更に一ヶ年又は半ヶ年分の協會費を前納され、は殘存誌代の月數だけ延長して正會員章を送り其の月から正會員の資格が出來ます。

切.....取.....線.....

川柳人協會申込書

住所 市 區 町 丁目 番地

氏名 雅號 職業

會費 年分前納の上入會申込みます

川柳人協會 御中

川 協 の 頁

川柳人協會の言葉

前々號（七月號）で川柳人協會創立の發表をしたところが、各方面から絶大なる賛同と激勵の聲が嵐の如く起り、眞に柳界の將來を祝福するに足るものがあつた。なかんづく「きやり」誌上には論陣の雄、品川陣居氏が堂々三頁にわたつて理解と同情に富める健筆をふるはれ、川柳人協會の創立に敬意を表し、心からなる「川柳萬歳」の唱和をされてゐるに至つては感激の外はない。

×

川柳人協會は眞に川柳を愛する人々によつて除々に築城的に形成することを期してゐるのであるから、如何なるデマにも驚かないし、怖れもしない。少々のデマ位では齒の立たぬところに協會の強味がある。協會の敵は川柳の敵、このスローガンで押して行くことを誓ふ。

×

従つて川柳人協會は協會の事業に理解なき人々に強ひて賛同を需むるものではない。徐ろに説いて靜に賛同を俟つばかりである。



在鮮川柳家には風水害の被害なしこの知らせがありました。



川柳始祖句碑再建の據金募集の締切（九月二十三日）が迫りました。



新名譽會員をお知らせいたします。

中澤 濁水君（高知）
岸本 水府君（大阪）



友 達

一 路 集

募 集 句

喜 多 春 秋 選

友達の一人活動役者なり
友達の極道話を聞いて寝る
花の山友達の肩と僕の肩
友達は誠になるまで居れといふ
私の友達と云ふ交番所
友達の晩婚説が酔ふてゐる
連名で友の結婚祝ふなり
五年ぶりに歸郷して
子供氣で歸れば友は妻もあり
友達を待たせた帯の結びやう
遠足に友達早く誘ひに來
珍らしく友きつちと時間に來
友も無く母と居る身の淋し
いの助
十歩
悲戀坊
香方
山月
素岳
石燈籠
勧誘の初歩友達を順々に
薄情な友達皆んな偉くなり
酒をのみ會ふ友達が同ひ年
友達に聞くと意見が皆違ひ
友達が來てうとん屋に用が出來
榮轉の友を送るに高い空
日向ぼこ子の友達をテストす
まア／＼金魚を二人して死な
洋服も靴も友達貸してくれ
友達の子もうちの子も幼稚園
(人)久々で會は友達更に見え
(人)友達の親切輕石まで見
(人)一宿の友情朝の靴の紐
文庫
葉光
明珠
菊路
菊路
水客
一角
同
曉童
石燈籠
新水
木履

屏風 | 襖 | 表装 | 一式

新秋表装の好期!

御一報下されば直にお伺ひ致します

山 守 表 具 店

大阪市住吉區倍野筋三丁目七三
電話 五五四六〇番(呼)

(地) 強情な子に歸らぬ連れがあら 一角
(地) 本當の友にされぬ遺族席 兎耳

(天) 友達と別れて見れば寢ねはかり 新水
(軸) 戰友ふたりのの大工と八百屋で

喫茶店

増位河柳選

集 路 一

純喫茶握手といふへたゞ笑ひ 春光
今日も又洋書抱へて純喫茶 澄風
約束の時間に早い喫茶店 秋無草
喫茶店のマツチ集めるワンコーヒ 葉光
喫茶店常連が出来貸しが出来 芳文
喫茶店深刻な顔一人居る 十歩
商談も纏まつて出た喫茶店 マリオン
懷ろをあてられ友と喫茶店 峯月
ない暇をあることにする喫茶店 正柳
コーヒ飲む靴はトロツト合あ合あ 正一
喫茶店そろそろ暖簾汚れてき 小貝
過去の母娘で派手な喫茶店 兄兄
マスターは變人でもつ純喫茶 さわだ
中年がひけめ感じる喫茶店 松月
喫茶店打明ける椅子の低過ぎ 廣々
窮屈な椅子でおちつく喫茶店 古秋
家出した姉がゐるような喫茶店 ふじ彌

皆様の店とぬからぬ喫茶店 七歩
喫茶店想ひ出せない娘が一人 奈落
喫茶店昔なじみの唄をかけ 陽幸
働いてゐる氣マダムの純喫茶 はぎ
女事務連れられて来る喫茶店 有耕
サービスの聲を揃える喫茶店 春秋
おうどんが来てやまいれる喫茶店 其奥
費ふても知れて居まる喫茶店 文庫
喫茶店傷の痛さを見て呉れる 山月
すばらしい名前場末の喫茶店 當峨山
喫茶店夫婦は同じものを飲み 不燈籠
ストローの音に夏めく喫茶店 四塊
純喫茶椰子の葉蔭に娘がきれい 由布
喫茶店メニューから離れれる若し 木履
洋傘の滴が溜り喫茶ひま 與三郎
喫茶店學生さんの名をおぼへ 豆秋

色紙
短冊
書畫
表装
風流
文具

大阪市南區心齋橋筋二丁目
大丸二丁目之辻東入

和正堂

電話南②二七一五番
振替大阪九一七五番

川柳人協

前號で「川柳職業人宣言」にのべた様にいよ／＼私が從來の職業を廢止し川柳専門に働き出すと今迄よりもゆとりが出来るので多年考へてゐた川柳人協會を創立し柳界の爲に一肌ぬぐ事にしたが私が川柳雜誌社の社主であるといふ理由から色眼鏡で見てゐる人が居ないとも限らない。

併し私が立案し私がお世話しようと思ふから、理事長の椅子にいただけで私はそんな人達には一切お構ひなしに／＼ゲンやれるだけやるつもりだ。誤解し易いいうるさい連中も相當に多いので、川柳人協會には會長も副會長も置かない事にしたかうした仕事は小さな野心や名譽慾のためにやれる事ではない。従つて急速に完成し得る事とも考へてゐないので、根氣よ

くやる積りである。理解ある柳人の應援と鞭撻をお願いしたい。

私が會て川柳の社會化を提唱し、これが機關誌として「川柳雜誌」を刊行した際も川柳の社會化なんてそんな事が出来るものですかんの爲にそんな事をするのですかと各方面を抑えてかかつた人もあつたが、一切お構ひなしに私は私の主張の實現に奔命したやうに今後も反對なんかしてるより素直に手を繋いで共に斯界の隆昌を計つた方がよからうと思ふが合點がゆかねば日和見もよいと思ふ。疑點があればどし／＼質問され／＼ばお答へもするし、必要があれば支那亞米利加は言ふまでもない歐洲までも押しかけてゆく覺悟でゐるからしつかりあと押しをして頂きたい。

私が從來の職業を放擲してまで柳界向上、柳人相互の交驩について微力を盡す事は、一朝一夕の考へではないのである。どつちみち柳界に骨を埋める路郎である。その爲には時に無遠慮な

言辭も弄するであらうし、出すぎた行動もするであらうとは思ふが、その點路郎のイゴイズムとして葬り去らずに一臂の力をお貸し願ひたい。川柳人協會の趣旨から言つても決して喧嘩越しになる様な事はしないから反對する人は遠慮なく反對して頂きたい。左顧右眄してゐては死ね迄に何一つ出来つこない事を昔から知つてゐるので反對者はそのまゝにしておいて自己の信ずる道に勇往邁進する計りである。従つてこの路郎の精神を愛する人々から先づ握手してかゝるつもりだ。

川柳人協會の仕事について誤解する第一のものは、「川柳雜誌」を川柳人協會の機關誌とする點にあるのであらうと思ふ。これについては私は左記の辯明を以つて御諒解を願ひたいと思ふ。

その第一は「川柳雜誌」を刊行した上に、例へ薄つべらなものである川柳人協會の機關誌を刊行することは容易でない。それよりも協會の目的はもつと外にある。協會は協會らしい仕事は

會

と

私

じめねばならぬ。徒らに費用ばかりかかる機關誌を出してその繼續に苦しむよりも「川柳雜誌」の一部を間借りする方が樂々と仕事をやつて行けると思ふ。仕事の内容については次號あたりからボツ／＼發表する考えである。第二は「川柳雜誌」

も川柳人協會の會員が増加すれば多少とも經營上にお蔭を蒙ることになる。

しかしこのお蔭を蒙る點にケチくさい反感があれば何をか云はんやであるが協會のために又私費を投ずることも考慮に入れていただかねばならないのである。

私の經營する「川柳雜誌」が間貸しをして多少とも稼いだと解釋されても私が川柳界に勤くと稱して自己の生活を保證せうと解釋されても何等はづるところはないのである。それは日本帝

國の爲に一身を犠牲に供して戦ふ軍人にしても彼等は俸給をもらつてゐるのである。恩給さへももらつてゐるのであると言ふ事を考へて頂きたい。私は自己の從來の職業を放擲して柳界の爲に働く以上私が辛じて生活し得るものは當然柳界によつて與へられるものと確信してゐるものである。「川柳雜誌」の刊行によつて或は私の貧しい柳話や選句によつて或は私の自由な揮毫によつて生命の保全を期したいと考へてゐるのである。

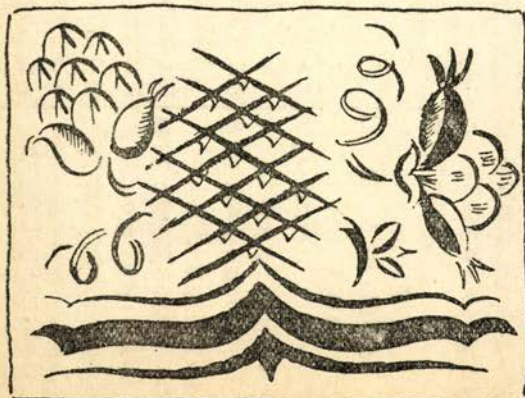
右にのべた私の言辭が御承認願へれば軍人が一死以つて國にむくゆると等しく私が川柳人協會を創立して柳界の爲に骨を埋める覺悟を御理解願へる事と思ふ。何分の御聲援がお願いしたい

× ×

終りに川柳人協會の仕事は川柳人の意志の總和によつて行ひたいと考へてゐる。従つて協會の總會の如きも先づ大阪や東京から始め、全國の理事や評議員の投票決議によつて總會地を決め

る事はオリンピックのその如くやらうと思つてゐる。私をお信じ下さるならば或は川柳人協會の創立が柳界にとつていゝ事だとお考へになるならば出来るだけ勇敢に即刻入會の申込みをして頂きたい。

— 麻生路郎 —





柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催し

▲川柳雜誌社(大阪)では八月廿五日夜戎橋の一角へ新装なれる三笠屋五階ホールで、沖野岩三郎氏を迎へて「浴衣かけの集り」を開催しユアを色紙に揮毫、それに沖野氏た。関西の小波さして知られてゐる高尾亮雄氏司會の下に、川柳職會者十名に贈呈、麻生君を繞ぐる業人を宣言した麻生路郎君が「川柳店びらき」と題し、柳話と職業特異な會合であつた。▲川柳同人の并露をされ、醫學博士であり又多年民族學の研究をされてゐる澤田四郎作氏は民族漫談「河童の話」をされた。ついで、小説家と念大會席上から斗白、一星、亂芳

しても童話家としても有名な沖野岩三郎氏は「氣違ひ」を語るを題してある角度から見た世の中の面白さについて夫々講演あり、尙漫

花川洞、蟬古、玄六、亂明、醉芳琴莊の諸君等の寄書を受く。▲川柳雜誌社兼川支部では創立十周年記念大會に麻生路郎師を迎へて盛大に開催する事となる。日時に来る十月十七日、會場は島根縣今市町驛前片岡旅館、記念川柳募集、「勅」麻生路郎選「歩」福田山雨樓選「戦」米村あん馬選、各題共三句以内。締切九月末日、投句先島根縣兼川郡高松村尼縁之助宛、入賞若干名に記念品贈呈。▲故市川巴流君(山科)の初孟蘭盆を迎へ、八月二十二日生前の知友集り法要旁々追憶の座談會が開かれた川柳家としては南北、水府、路郎二山の諸君が出席された。▲みちのく吟社(青森)では十月號を以つて第二百號となるので記念誌上川柳大會を計畫され、募集吟の選を三太郎、周魚、路郎、水府、雀の五氏に依頼されてゐる。その豪華版の來たる日を鶴首してゐる▲川柳雜誌竹原支部(廣島)では

柳誌要目 (八月號)

明窓獨語

村田 周魚(川柳きやり)

雲を吸ひ霧を吐く(時評)

品川 陣居(川柳きやり)

農村川柳家の立場から

宮本夢一文(川柳きやり)

川柳よしなし言

生方 敏郎(蒼空)

「井上劍花坊句集」精讀(七)

渡邊 尺蠖(蒼空)

淋しい五葉より

故淺井林之助(湯の村)

覺十篇談義

姪子 省二(湯の村)

信州の曆刷り萬句合せ(三)

綿谷摩耶火(湯の村)

川柳への發展(一)

石崎 柳石(川柳みすか)

紫陽・枯佛論

石崎 柳石(川柳みすか)

川柳國名盡(六)

大田 秋水(静岡川柳)

柳 界 展 望

九月七日二週年記念句會を盛大にて催される筈、宿題「煙」五選、雜に於て開催されるこの事盛會を祈る。▲名古屋新聞社主催で初代川柳會本社より諸家の短冊揮毫を纏一句「作品批評を中心とする座談」が催されとの事。▲川柳雜柳忌川柳大會を九月廿三日に開催めて送付した「川柳松本しなの吟會」が催されとの事。▲川柳雜柳忌川柳大會を九月廿三日に開催社（松本市）では川柳趣味展觀會 誦社今治支部の八月例会が二十六を九月二十一日二日の兩日に渡つ日に開かれ、その席上より青明、南大人、仙海、文庫、曉童、香方會を十一月一日に開催される由。て大名町の鶴林堂に於て開催されるが、廿一日夜は麻生路郎師を迎蛇の鷹、一風、心府、承水の諸君盛會を祈る。▲九月六日、京濱川へて座談會が開かれる筈。▲新等の寄書を頂く。▲八月廿五日み柳吟社聯盟結成の寄書を頂く。芥興川柳社（高知）では創刊一周年すか川柳社（今治）の催して菊間（子粒）陣居きやり（花戀坊）横濱知記念句募集のため、全國柳壇の大家十名にその選を依頼されてある君から寄書を頂いた。▲川柳地帯が堅實な發展を祈る。▲第三回朝（横濱）は九月號を以つて一週年を起句會（京都）が八月廿五日二條迎へられた。御發展を祈る。

▲神戸荒田町商店街を房川素生、放水路、健康の諸君。▲川柳雜誌公園で開かれ双光、竹雅、文啼西代商店街を金永睦花の兩君が指社大鐵局支部「吟柳社」の九天、佐一郎、無折、鼓城の諸君等より導して川柳繪行燈の夕べを賑わし久米雄、一雄、安綱の四君が廣島寄書を頂く。▲比氣麻雀、白鳥香く開催された。▲川柳團扇展覽會鐵道局（榮轉）されるので九月二日州（東京）の兩君は高圓寺アラツルがふあうすま川柳社經營部の手でにその送別會が大鐵クラブに於てに於て八月一日から十日まで繪さ八月二十二日から一週間俳茶堂に開催された。本社から路郎、機見川柳展覽會を催されたこのこと。

▲川柳家と漫畫家の集りが八月八日正後から鶴見のキリンブルー工松井開月畫伯で、非常な好評をが参加した。九天、久米雄兩君の場で催された▲井上劍花坊の三回得たこの事▲米澤松川吟社主催の數年來の勞をねぎらふために記念展忌が九月十二日午後六時半、中野米坂線全通祝賀川柳大會が九月六品の贈呈があり、頗る盛會であつた。散會後同クラブ食堂に於て送望區大和町二八一井上方柳樽寺に於

柳樽を型懸づけ
る基本的用語。文法的解説（二）
木村半文錢（むさしの）
俳諧を忘れた俳人
山本 斗酒（川柳地帯）
古今川柳評論（八）
堀口 塊人（昭和川柳）
藝 術 序 論
藤澤 巷夢（秋田川柳）
川柳園の賑合ひ
意外 變人（京）
「川柳江戸砂子」と「柳多留拾遺」
の著者（三） 櫻井六葉（梅鉢）
柳 窓 漫 筆
和田天民子（川柳俱樂部）
名所川柳智多半島の巻
鈴木 可香（川柳草薙）
定家の和歌十駄さ日車の
傳統美（其の六）
木村半文錢（川柳ビル）
絶對川 柳 觀
中村百中園（川柳ビル）
連作と題詠の連作形式
安平 陸平（川柳ビル）
二つの圓周
觀田鶴太郎（視野）

柳 別宴が催され、同君等の健康を祝

會(大阪)同二十五日、於市電木綿
福して乾杯した。▲蝗會(大阪)は
九月十五日夜、於天神橋五丁目下
車東へ入る妙見宮。兼題「和製」
「類」▲島の内會(大阪)同十五日
於日本橋北詰北入淺野君方。兼題
「閑え」「三味線」「土」▲いざよ
ひ會(大阪)同十六日、於心齋橋お
ぐらやビル三階心交社。兼題「小
遣ひ」「ハンドル」相談。▲コム
バス會(大阪)同十七日、於四貫島
大通三丁目南へ西成線を越えて一
丁西側、岬氏方。兼題「更生」「活
字」「密談」▲井々會(大阪)同十
八日、於土佐堀船町住友俱樂部、
兼題「庭」「夕焼」「鍋」▲電會(大
阪)同十九日、於、南堀江通二ノ
一市川番茶子居。兼題「働く」「ブ
ラン」「月」▲泉會(大阪)同二十
一日、於堺市小林寺町西一丁目一
五、大島花王君方。兼題「名月」
「夜長」「露」▲赤煉瓦會(大阪)同
二十二日夜、於日本橋北(牛丁東
側、淺野君方。兼題「底」▲天地
柳聯盟)日時九月廿三日午後六時

半、於四條繩手東仲源寺、兼題「
青空」「面影」▲京都川柳社例會
日時十月一日夕、於四條繩手仲源
寺、兼題「無分別」「欠點」「窓」
「膝」。

創刊と廢刊

▲川柳廂(東京)が福田北堤君等に
依つて發行される由、發展を祈る

消 息

▲臨田梅子女史(大阪)の引卒した
帝都海上旅行見學團は、八月十七
日朝元氣に歸阪された。▲前田五
健君(川柳人協會名譽會員)は八
月十八日社用で上阪、突如本社を
訪問された、公園察で更けるまで
柳談に花を咲かし二十日夜八時、
柳談に花を咲かし二十日夜八時、

職業的立場から

丘 四 郎 (視野)

青明の再轉 (八)

木村半文錢(ふあうすこ)

「ふあうすこのこと」

相元 紋太(ふあうすこ)

古川柳妙句評釋

北夢 之助 (若柳)

晚 涼 寸 談

岸本 水府 (番傘)

柳 樽 拾遺 論講

糸岡謙堂 外八名(番傘)

垣間見る川柳(承前)

三木 仁平 (川柳獨活)

柳多留四篇論講(20)

(三味線草)

前書きとタイトル

中澤 濁水 (帆傘)

川柳考證(關所)(8)

植木 鬼佛(川柳研究)

川柳竹馬居雜稿(6)

蛭子 省二 (長鼓)

内地柳誌の朝鮮觀檢討(長鼓)

紙 鐵 砲

(みちのく)

た。尙九月二日仁川を立つて來阪

へ赴かれ、二十五日夜川柳雜誌社して活躍された泉三郎君(新宮)は

やなぎ洞柳語 宮本 夢一文(みちのく)

されるおたよりに鶴首してゐたが

主催の「浴衣がけの集り」へ出席 二十四日神戸出帆の加茂丸にて濠

洲へ渡航された。▲井口蛙郎君

七日京都より故郷の方へ寄る都合

上逢ふ事が出来ない旨お便りがあ

された。▲安川久流美君(川柳人

つた。▲石曾根民郎君(松本)の甥

協会名譽會員)は八月廿日石川縣

炎で慟んでゐられる、一日も早や

山崎一郎君(童謡歌手)が八月廿一

の能美郡寺井野に鞆川柳社を訪

ひ白山山脈を望む樓上で初秋の句

日夜AKから二度目の放送をされ

た。▲安井八翠坊君(下關)から暑

を作つたり陶器に句を書いたりな

中見舞にそへて「炎天に稼ぐのも

どに興趣を満喫せられたが

放送をされた。▲熊澤車山君(東

よし避暑も好し」の句を頂く。▲

郊外の電車すれ／＼花木植

久流美 (あきら)と命名された、お喜び申

藤村誠君(大阪)は、暑さにもめげ

師と二人繪具をぬれば風涼し

上げる。▲吉川英治君(東京)の

す詩と俳句及び詩と川柳の比較研

究をやつてゐられる程の眞摯な方

文史郎 電話局名番號が變更になつた由。

ですが、この程、前田雀郎君の「

の外、テンボウセン、興可樓の諸

(赤坂二七三二)。▲大石四郎次君

川柳と俳諧」を讀んで、此の種の

君から寄書を頂く、▲權藤瓦千君

(靜岡)は八月十二日から大阪へ、

研究は意義ある事だと思ふと云ふ

おたよりに接した。▲江戸みつる

七十に近い老體を以つて、鋼鐵研

君(大阪)は商用のため臺灣に出張

究所を東京に設けてゐられる關係

月上旬例によつて九十九里へ避暑

され、八月二十二日歸阪された▲

上近々東京に移轉されるこのこと

されたこの事。▲大谷五花村君(

村松夢裡君(大阪)は八月二十四日

▲石曾根民郎君(松本)のお宅では

川柳人協會名譽會員)は八月上旬

子達をつれて濱松へ遊ばれ、これ

八月十九日女子出生、責任の重大

夫人同伴白馬岳へ登山、二十三日

から天瀧下りをされるこの繪葉書

を感じたり、長生きをしたくなつ

の海峽親善川柳會へ出席され二十

だよりを頂く。▲酒井大權君(松

たり父性愛を吐露した便に接した

五日札幌放送局から放送された。

▲元川柳雜誌社天王寺支部同人と

▲川上三太郎君(川柳人協會名譽

▲川上三太郎君(川柳人協會名譽

望山)は八月二十四日急用で比叡山

▲元川柳雜誌社天王寺支部同人と

▲川上三太郎君(川柳人協會名譽

柳

界

展

望山

▲元川柳雜誌社天王寺支部同人と

▲川上三太郎君(川柳人協會名譽

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

業の鶏が見えない日暮かた○陳情

柳 展 望

柳(會員)は、五花村君歡迎川柳大會を二十五日午後五時から札幌市の北野家に於て開催された由。▲小君を訪れて、料亭から左の句を寄

る。▲八月二十九日水谷鮎美、天野卜居の兩君は名古屋の吉田水車

往復されてゐるが一日も早く御快方を祈る。▲磯野天邪鬼君(横濱)は八月末から横濱貿易新報社編輯局へ勤務されてゐるとの便

に行く渡舟押してやり、(9)なんでも知りたいと思つて居ます、(10)有女一人、(11)人間でない人間、(12)昭和六年頃

林不浪人君(川柳人協會名譽會員)は八月廿七日仙臺中央放送局く

池の鯉黙々としてターンする

水車(京)は二十三日海峽親善川柳大會

(426) 日下部舟可

川柳講座を擔當され「作句上のコツ」について放送された。▲二十

三人の瞳があふてゐる夕べなり

に三太郎、太郎丸の三人で出席され、月末に歸京されたとのこと。

五日、天王寺公園事務所より出火

打ち水のあまの鯛かやビールぬく

▲生方敏郎君(東京)は八月卅一日夜名古屋から放送、知多半島を廻

(1)日下部久吉、(2)舟可、(3)明治四

幸ひ小部分に止り、主要建物には

▲丸島利生君(大阪)は、八月廿日遊され、九月四日來阪、同夜六時

二十五分B Kから「落首について」

一つ(来る煙草、(9)觀劇、(10)妻あり、(11)梅雨、色眼鏡、(12)昭和九年一月

知らせがあつた。▲故劍花坊未亡

から十日間の豫定で北海道札幌へ

を放送され、麻生路郎君に迎えら

れ、同夜は、大阪バンシオンホテ

人井上信子、平村たい子江口渙夫

視察のため旅行されたこの事だが

共ニ快談されたが、五日の夜行で

一年八月廿日、(4)大阪市、(5)南區

人孝子、橋浦時雄夫人等を組合員

北海道の初秋の感は一入深いもの

▲八月下旬朝鮮方面

(7)白魚の白さが白いちりれんげ、

に、組合長新居格氏を持つ城西消

▲鷺田南耕君(神戸)は眞

ルに放送局の岩崎愛二君を合せて

(1)吉田恒治郎、(2)美芳、(3)明治廿

費組合では高圓寺町三ノ三四六に

宗木邊派本山で得度を受けられ圓

歸東された。▲八月下旬朝鮮方面

鰻谷中の町一地、(6)雜貨商經營、

日その基礎工事を行つたが、夫人

光寺衆徒として法名を念勝さ下命

をおそつた颱風は甚大な被害を算

(7)白魚の白さが白いちりれんげ、

連が姐さん冠りでヨイトマケをや

された由。▲大谷五花村君(川柳

したが、幸ひに姪子省二君(川柳

(8)賣られ來てネオンの

り身を以て日本婦人勞働史の一頁

人協會名譽會員)は八月二十九日

の宅には別段異

の見える河向ひ、雪降りの舞臺子

を飾つたさうだ。▲南海高島屋の

午前八時四十分から廿分間(川柳

の味ひ」と題して、H Kから放送

く尙八月下旬別府御清遊との報に

池澤丈雄君(大阪)は「浴衣がけの

された。▲柴谷幸二郎(兵庫)

接してゐたが、微熱持續のため旅

役の出る舞臺、(9)アマチュア寫眞

集り」の當夜、偶々淡路より父君

の母堂が名古屋に於て病臥され、

行中止との御便りを頂いた。御快

映畫、音樂、(10)妻有。子供無

來阪のため出席し得ず「待人は來

親思ひの畫伯名古屋兵庫間を度々

方を祈つてゐる。▲九月二日星野

轉居

▲中岡三吉君(大阪市北区堂山町堂山アパートへ)。

し、(11)傲慢なる人。謠曲、(12)昭和五年八月頃

兄君(名古屋)は、ドライブで豊

▲安西杏三君(大阪市住吉區阪南町東一丁目三一番地へ)。

▲三木堂山町堂山アパートへ)。

清水 英介

丹江方面へ行かれる大島清明君(

▲昭和三八へ)。

▲重森希峰君(大阪市西成區粉濱本町三ノ五三へ)。

(1)清水精一、(2)英介、(3)明治二十年九月二十五日、(4)大阪市東區京橋一丁目、(5)大阪市東成區中濱町二四五、(6)大阪工敷火砲製造所、(7)一雫井戸一面にひびくなり(緑雨)内の音で玄關派出に開き(紅壽郎)、(8)山茶花の今年は窓の

川柳人協會名譽會員)大連は車中

▲川柳俱樂部(東京市牛込區揚場町八へ)。

▲蛭子省二君(朝鮮光州府本町四ノ二八へ)。

さんか越し ふさ淋し妻萬歳が好きといふ、(9)子供と共にハイキング。謠曲、(10)家内と長男三人暮し、(11)雄辯家と牛肉、(12)昭和三年冬頃

よりを寄せられた▲正木柳建寺君

▲加賀破竹君(大阪市東區伏見町五ノ六一へ)。

▲岡田夢舟君(伊豫溫泉郡道後湯之町樋又一〇七三へ)。

▲落合六文錢君(東京市澁谷區大和田町二七へ)。

(京城)から颱風損害は輕微との御

▲阿波梗郎君(神戸市灘區將軍通二丁目二九一へ)。

▲京橋吟社(寶ヶループ改稱さる) (東京市京橋區西八丁堀三ノ一二

三年冬頃

便りに接した。

改號

▲近藤抱日君は虹路(東京)

▲利見布城君(大阪市東淀川區三國町七〇一宮崎電器製作所

▲齋藤正次君(横濱市牧方へ)。

▲志水七

訃報

▲明石榮一君(東京)が逝去された

▲石川達男君(神奈川縣神奈川區平沼町一ノ一八同潤會ア

▲齋藤正次君(横濱市牧方へ)。

▲志水七

哀悼。

▲小島捐得君(大阪市北區澤上江町六ノ九へ)。

▲岸庄三郎君(大阪市天王寺區上本町八丁

▲川柳地

五日午後二時滋賀縣八幡町に於て

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

永眠された。享年三十才、謹んで

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

哀悼の意を表する。▲安東花園君

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

(川柳獨活社同人)は八月十一日午

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

後十時三十分突然逝去された川柳

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

獨活創刊に當つて盡力された人だ

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

けにその逝去を深く惜しまれてゐ

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

るが、同社では次號をもつて追悼

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

號とする旨發表された。

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

望

▲東信太郎君(横濱市神奈川區篠原町中

▲山崎海中金君(神戸市須磨區一ノ谷町二丁目一七へ)。

▲花岡堯子

七月廿八日 於晴朗食堂 酒井大樓報

新裝の部屋カーテンの白もよし
アール・デコなど新装の見せられ
新装ヘタリヤの赤が燃へて居る
新装の店のに溢れる時代色
新装は成れり店主の燃ゆる意氣
新装ミカメラに入つた經營者
新装へ主人の愛嬌見直され
新装へ輕い財布を引つばられ
新装がはつきり見える世の流れ

新裝の社宿直の古疊
水菓子が大阪辯でむぎ續ひ
水菓子へ藝者器用な指使ひ
水菓子を取りそなた妻揚子
無遠慮な指へ西瓜の色がよい
水菓子の艶銀盆へ灯がすべる
水菓子の客は女房にまかしさき

五健耕一
五健耕一
大標
同
耕一路
雨城
大觀
晴期
大樓
靈
五健
晴期
雨城
大樓
雨城

雨大 雨晴 五靈 大晴 大雨 耕同 大五 耕五 大 鐵李 八鐵 八李 八湖 鐵李
城樓 城期 健子 樓期 觀城 路 標健 路健 大 州徑 步州 步徑 步山 州徑
大樓報

水菓子の齒跡は薄い紅がつき
ウインドを青葉で飾る水菓子屋
やがて空を掩ふドングリ殻を割る

大城樓　大雨　大櫓

七月三日 於斗風居 酒井斗風報

霧深く音ばかりなる川蒸気
古傷が痛みだまつて蓮を見る
わびとさの蓮のやぶれにあるひかり
ト斗風聲
居

七月二十五日 於藝銀支店

汗姿
文明は汗で食へない世を作り
捕はれしまゝの姿で寫される
姿見へ淋しさまでが映つてゐる
芳芳
水泉
詩宵

七月二十三日於村剪風居

すだれ　ローマンス　あはて者
 青桐の下　街の風景
 青すだれ妻の忌日の香はけむる
 すだれく戀のすだれさなりにつけり
 すだれ越し波の音聞く餘生なり
 巻き上げてすだれに遠い七日月
 善人の姿をあはて者にみる
 あはて者梅印を押して引下る
 鮎　同　潮　雨　風　美　居
 美　美　美　美　美　美　美

飯事のお膳へ桐の實かこぼれ
青桐の下で給の具をぬつた戀
ウイ風の肩で受けてゐる堺筋
神を説く聲は夜店の灯につゞき
街の角罪さ罰さおまつてゐる
ローマンス茶朝の朝のふたりきり
結局は金かたきのローマンス
川柳雜誌社
高知支部 高知旬會（高知）
七月廿一日夜 於ブラジル樓上
中澤濁水報
燭風機 冷淡 日蝕
燭風機子供が立てば 何か飛び
燭風機 見合の髪を氣にさせる
晝は蠅 追ふ魚屋の燭風機
言既蝕 アイヌは土下座して祈り
日蝕 一年 寄も出てまぶしがり
日蝕に父の博士はさり合はす
濁水
維誌社
川柳 簀川支部（鳥根）
七月十七日 森山さわだ報
おもかげ 吉報 強氣
倂は夢だけでよいそれでよい
就職の報せも春の風に乗り
寢こんで吉報を待つ頼りなき
吉報に涙ぐむのも女です
女の強氣涙さなつて出る
海菜
松山川柳會十七日旬會（松山）
七月十七日 於耕一路居 酒井大樓報
風通し
つぎこばすビールの泡へ風通し
風通し女の物を派手に干し
雨城子

七月十七日 於菰一路居 酒井大樓報

つぎこぼすビールの泡へ風通し
風通し女の物を派手に干し
雨 靈 子
城

各 地 柳 壇



横 經 輯 編

と私」を發表した。

川柳人協會が私を中心として
の集團かの如く解釋してゐられ
る方もあるらしいので一寸書く
氣になつたのである。

川柳人協會は川柳人の箇々箇
の相互的な集團であつて私はそ
の集團の世話役の一人に過ぎな
いのである。これは社會の組織
の判る人々にはすぐうなづける
のであるが常に自己を中心に動
いてゐる人々には、理解して貰
ふまでに相當の日時を要するも
のと思つてゐる。

▲「川・協・の・真」を設けた。こ
れは川柳人協會自體のことや川
協全會員へ報告すべき柳界の重
大問題などの告知板の用に供す
ることにした。

▲川雑誌が改組されてから、始め
ての會を八月廿五日の夜に道頓
堀の三笠屋で開催した。句會で
はないが、コーヒを吸ひながら
句を語り、句を書き、柳味横溢
の集りに頗ぶる好評であつた。
川・雑誌では今後も時々、斯う
した氣分中心の會をやりたいと
思つてゐる。

▲「三都柳壇の今昔」の東京は角

戀坊、正光、啞三味、山雨樓の
諸君に京都は松窓、紫明、司郎
無冠王の諸君、大阪は半文錢、
水府、雞牛子の諸君を煩はした
東京の明治時代では久良伎、劍
花坊、朴念仁、而笑子、鈴ン坊
角戀坊、郷左衛門、荷十、紫痴
郎、萬雄、古蝶などのことを語
つて欲しかつたが、執筆を依頼
した久良伎翁からは「病中失禮
仕候近作淺ましき世さ思へど
捨棄て江戸の心を説かぬ日はな
し少々悲鳴を掲げ居申候御一
笑」の返信に接したのさ、周魚
君からは一身上の問題で執筆の
機會を失つた旨の通知に接した
ため、いさゝか寂寥を感じた斯
うした方面に就ては他日稿を改
めてお願ひすることにした。角
戀坊君の「明治新川柳勃興時代
」が來なかつたら丸つぶれにな
るところだつた。京都では福造
君が「何展もござれ嬉れし繪
の具店」さやで大多忙。

大阪の昔は當百君に頼んだが
執筆不能の回答に接したので、
これ又半文錢君の一人舞臺にな

川 柳 と

松 浦 靜 山 侯

石 崎 柳 石

〔前略〕川柳は更に一層あが
れるか脊令の後に河童が又
教へ」61卷

「狼夜々村里を徘徊し戸を覬ふ
或家より一儒講釋を仕まひて出
て還る、狼即喰ふに須臾にして
これを吐く、友狼問ふ、いかに
して吐きし、狼曰、腐れるたり

（笑喝）

川柳句 儒者の家根君子の徳
が吹きめぐり」續36卷

○

これで「甲子夜話」の川柳句
の一二を除く全部を掲げた次第
である。最後に、靜山侯がその
句意を知つて、拂手禁口的一句

つた。

私自身が書いてもよかつたが編輯子は樂屋で働くものと相場をきめて遠慮した。全體から云へば「昔」に引きかえて「今」の方が何れも筆陣ハツラツといふ状態、熱意のほどと思はれて感謝の外なものである。

▲久しぶりに阿部閑生君から、「街の雑音を讀む」をいただいた。橋本絲雨君の多年の勞作に對して眞摯な批評をものされたことは編輯子も感謝してゐる。

▲お待ち兼ねの「川柳指導講座」を又々本號から續載する運びになつた。擔當塚越正光君の勞を多とする。既に次號の「夢」の原稿まで届いてゐることをお知らせする。

▲木村牛文錢君の「六厘坊十句の再檢討」は誌面の都合上、次號に割愛した。筆者並びに愛讀者諸君の御諒恕を乞ふ。

▲先づ「近作柳塔」へ出句し、次いで「川柳塔」への作品を送つて來たのは喜多春秋君一人だつた。他の人々は矢張り「川柳塔」さして出句された。習性はおそろしいと思つた。しかし、

こちらで勝手に二分するのにも變なものだと思ふので今度も「近作柳塔」へみな繰り込んでしまつた。「川柳塔」出句資格者は本誌署名欄の上段にある投句規則を一應讀んでいただきたい。

▲「各地柳壇」發表の小規が前號から少しく變更された。幹事諸君の留意を促したい。

句會の状況などは、句會報に書かず、別便で御一報あれば、「柳界展望」に掲載の勞を採ることにした。この方が句報欄よりも遙に速報となることは云ふまでもない。

▲「日本名所名物川柳」は大好評であるにもかゝらず、集句が妙ないのは甚だ遺憾である。これは課題が一小部分に局限せられるので無理もないとは思ふがあまりに集句が少ないと選者に對しても氣の毒だし、讀者にとつても興が薄くなるので、その地方の川柳家並びに、その地方に馴染みの深い方々はつめて応募され「わしが國さ」の宣揚に奮起されたい。

▲「川柳と松浦靜山侯」の原稿が前號で全部掲載済まばかし思つてゐたら、僅に原稿紙一枚を三行を残してチョン切られてゐることを發見したので「編輯縦横」の下段へ埋舛として小さく取扱つたことを筆者並びに讀者諸賢にお詫びする。

▼「柳誌要目」の欄を新設したこの欄によつて、その雑誌の横顔が判るすれば一つの使命は果たせる譯だ。

▲社の改組と同時に、支部の改廢、支部幹事の更迭などが行はれた。

道頓堀支部の幹事、青木史呂君は社の都合で除名。支部は再び元幹事の庄万よし君にお願ひすることとした。

市岡支部を廢止し、同支部の平井春光、平井與三郎君等を除名する。

松江支部幹事奈賀井柳人君は支部同人協議の結果、勝谷山川兄君と更迭されることになつた。活躍を祈る。(路)

を掲げよう。讀者諸子の想像に任せて――

「或宴席にて某侯予にこの句奈何之間はれけるが、急に曉るこゝ能はず

門口に醫者と親子が待つてゐる」59卷

○

かく「甲子夜話」を繙き來ると、意外に柳句記載の頁の多いのに驚き且つ遠く川柳認識者を得て悦びさへ感じさせられるのである。この著に據る靜山侯はどうして粹にくだけた御隠居振りで、あながち古柳句詠の淺黄裏の親玉では決してない。

三越で澤正展を觀た。熱で終始した澤正は熱を驅使することを知つてセーヴすることを知らなかつたのではあるまいか。しかし熱を驅使することも奔流させることすらも知らない川柳家は澤正に學べ。(不死鳥)

川柳雜誌社關係人々 (順はろい)



川柳雜誌社

社主 麻生路郎

贊助員

池澤樂居 長谷川一雄 大田弘平 岡本方平 片岡直方 笠原路生 嘉納純二 田中辰秀 長崎柳太 長岡半太 長野晴濱 國枝史郎 藤村史郎 藤本卯之助 顯原退藏

客員

赤井清司 淺田殿一 末弘太郎 伊藤彦造 鳥山一歩 沖野岩三 大島濤明 大谷五三郎 大西長三郎 岡田三子 小川武 龜井辰修 川上三太郎 川村花菱

米村あゐ馬 田村孝之介 谷脇素文 生方敏郎 高尾亮雄 窪田銀波樓 安川久流美 前田雀郎 前田五健 食滿南 柴谷宰二 篠原春雨 蛭子省二 藤里好古 小林不浪人 森東魚

支 部 と 幹 事

兵庫支部(神戸市)	臺中支部(臺南市)	十三原支部(廣島縣)	竹原支部(廣島縣)	伯耆支部(鳥取縣)	光笑支部(廣島市)	今治支部(今治市)	今里支部(廣島市)	光里支部(廣島市)	西條支部(愛媛縣)	松江支部(松江市)	御池橋支部(廣島市)	鶴町支部(廣島市)	天王寺支部(廣島市)	御旅支部(廣島市)	松山支部(松山市)	鳥取支部(鳥取市)	京都支部(京都市)	篠川支部(和歌山縣)	田邊支部(和歌山縣)	蟹ヶ池支部(大阪府)	梅田支部(大阪府)	高知支部(高知市)	國館支部(函館市)	神戶支部(神戸市)	九三支部(大坂市)	道頓堀支部(大坂市)
幹事 濱田久米雄	幹事 宮内耕人	幹事 淺野牧	幹事 松井美	幹事 三鴨美	幹事 永田里	幹事 月原會	幹事 廣原都	幹事 市場食	幹事 竹内機	幹事 荒井英	幹事 山本喜	幹事 勝谷川	幹事 西岡白	幹事 須崎豆	幹事 江戶み	幹事 酒井鐵	幹事 中島柳	幹事 明石綠	幹事 尼辻左	幹事 銚子美	幹事 水谷春	幹事 澤井修	幹事 龜井辰	幹事 喜多秋	幹事 北山萬	幹事 庄山

投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製業書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封封入の事。

募 集

第十三卷 第十一號懸賞課題

十月五日締切

(十句以内)

竹 西 田 艸 樂選

第十三卷第十二號懸賞課題

十一月五日締切

(十句以内)

十八九 前 田 五 健選

每 號 募 集

近作柳樽(十句) 麻 生 路 郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

懸賞句規定

- ▼天地人三位に薄謝を呈す
- ▼一般應募歡迎

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○歸代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十一年九月十日印刷
昭和十一年九月十五日發行

第十三卷 第九號
(毎月一回十五日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人

麻 生 幸 二 郎

大阪市内西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所

川 柳 雜 誌 社

電話天下茶屋二五七九番
振替 大阪七五〇五〇番

東京市芝區南佐久間町一丁目五二番地

支 社 川 柳 雜 誌 社 東京 支 社

店書捌賣

(大阪)大賣捌大寶書店 參文社 明文堂 其他 市内各書店
(東京)丸の内東京堂 丸の内松松堂 丸の内吉岡書店 丸の内玉森堂 丸の内紀伊國屋 丸の内三味堂(神戶) 米田、寶文館(函館) 石塚(京都) 三宅(名古屋)靜觀堂

川・雜・案・内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行地すこ
どに金十錢、但し前金切手代用可、その他
敬請、郵轉、句會案内、柳事廣告、その他

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小
物、短冊を川柳家に限り左
の通りで頒布致します

軸箱入 貳拾圓・額 貳拾圓
小物 五圓・短冊 參圓
御申込は前金で發行所へ

投句用箋

川柳雜誌投句用箋の昭和十
一年度新製が出来ました。
投句には本社正規の此用箋
を御使用下さい。

五十枚綴 二冊 金十二錢
(送料共)

御申込は川柳雜誌社へ

切手代用可

轉居御知らせ

蛭子省二

朝鮮光州府本町
四丁目二八

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より
第十卷まで

各一卷 金壹圓五十錢

第十一卷及第十二卷 金參圓

送料大阪市内 一冊六錢

市外 一冊廿四錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の
葉柳」の殘本が僅かばかりし出
て來たのでお頒ちします。日
車、半文錢、路郎の三氏の句
しか載つてゐない樹形四頁も
の全三部で十錢、二錢切五枚
お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

講談俱樂部の 懸賞川柳を募る

懸賞川柳を募る

課題 夕刊、涙

選者 麻生路郎先生

(一) 用紙官製ハガキにて一
枚一句のこと

(二) ハガキの裏には川柳と
朱書し選者名、課題並に

住所姓名はその脇へ明記
すること

(三) 締切 九月廿日

(四) 宛名 東京小石川音羽

講談俱樂部懸賞部

懸賞川柳

課題「雷」十月十日

用紙は官製ハガキ(化粧柳壇
と明記の事) 選者麻生路郎氏

秀逸數句に薄謝を呈す

宛先 大阪市西成區玉出本通

三ノ三六 麻生路郎氏方

化粧新聞社柳壇へ

川柳を作る人、愛好する人
の必讀誌

川柳俱樂部

毎月一日發行
一部廿錢・送料一錢

東京市牛込區拂方町一四
川柳俱樂部社

川上三太郎主宰
(毎月一回發行)

川柳研究

一冊 金廿錢
半年 金一圓
一年 金二圓

異色ある本誌の創作欄と初心
者への入門欄をアナタは絶對
に見逃してはいけません
見本希望者は二錢切手十枚同
封左記へ
東京市王子區上十條町八五〇
發行所 川柳研究社

川柳きやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豊島區高田本町二ノ一四

六八 川柳きやり吟社

(取次所) 川柳雜誌社

川柳
句集

街の雑る

不朽洞版

作家生活十三年、黙々として吐き出した著者そのままでの生きた姿、一讀再讀人生の底邊に觸るゝものあらん。敢て薦む。

橋本緑雨著

麻生路郎先生序

定價五錢 送料四錢

不朽洞

大阪西區玉出本通三

振替口座大阪三〇三

發行所

祝川柳人協會創立

脇田 勇
脇田 梅子

尼 綠之助
池田 可宵

島根縣簸川郡高松村

朝鮮仁川府宮町

大阪都民新聞社

萬よし 庄 健 一

・新膽寫印刷引受・

◆新しい時代の感觸を多分に盛つた新膽寫美術印刷の御利用をお待ちいたします。

◆同人雜誌、趣味の會報郷土誌、報告書規約、案内狀、各種カタログ、廣告美術印刷等、如何なるものでも御用命に應じます。最少五六十の印刷から數千、最高記録は一萬三千枚を同一原紙で刷りました。

◆普通菊判誌のものなれば三百部印刷、十頁のもので一冊當り三錢餘りで出來上ります。詳細については御照會願ひ上げます。

一輪草舎工房

大阪市西成區東粉濱電停前
振替大阪12612番

川柳家に告ぐ
旗印 艶出 スクツワ



半封度 五十錢
一封度 八十錢
一圓五十錢

用途と御使用法

◇家具、ピアノ、蓄音器、ラヂオ、白木唐木竹材細工其他硬質木材を使用せる一切。自動車、金庫、レヂスター等其他塗料を施せる金屬面、靴鞆等皮革製品其他加工品と調度等
柔かい布片に少量を移すか或はハンカチーフ大の布に包んでなるべくスリ込む心持にて拭きます。塗布後數分で乾燥致しますから軟かい乾いた布片で空拭きを致しますと強い光澤を生じます。家具の壽命を延長します。綺麗好きの方は是非試みて下さい。

代理店

大阪市西成區玉出本通三
振替口座大阪三〇三九二

不朽洞

内科・小兒科

和漢洋醫院

醫學博士 長谷川成一

大阪市南區長堀橋一丁目
電話 南四一八八番

澤田小兒科

醫學博士 澤田四郎作

大阪市西成區玉出町本通一丁目
電話 天下茶屋二九一三番

清 酒 白鶴

受飲家
の川柳

喜びに添へて白鶴届けとき
白鶴の方に幹事は決めちまい
白鶴をいつもきらさぬ暮らしむき

ハクツル



元齋發

嘉納合名社會

大阪・東京・神戶・京都・大連・奉天

推 奨 士 博 學 醫 林 梅
監 査 士 博 學 醫 瀨 片

錠 ムーユシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、惡阻期を安全に經過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめます。お産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の惡化を防止し、乳兒も随つて健康な家庭の人とします。凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

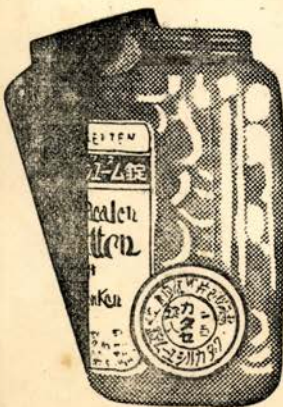
片瀨醫學博士述、安産のために進呈

の
た
め
に

代時ムーユシルカ
てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊産婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、敝店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシユーム錠」



店商助卯田和 町修造坂大

あなたの健康のために

あなたの藝術心を満足せしめんために



そして可愛いお子たちのために

伸びゆく子どもたちに

正しい舞踊を教へないのは

罪惡です。

美しい律動教育は

人間の一生を幸福にします。

石井 漢 舞踊研究所

大阪堂ビル二階 事務室二階二〇一
(電話 北五八九〇番)

理事 高尾 亮 雄